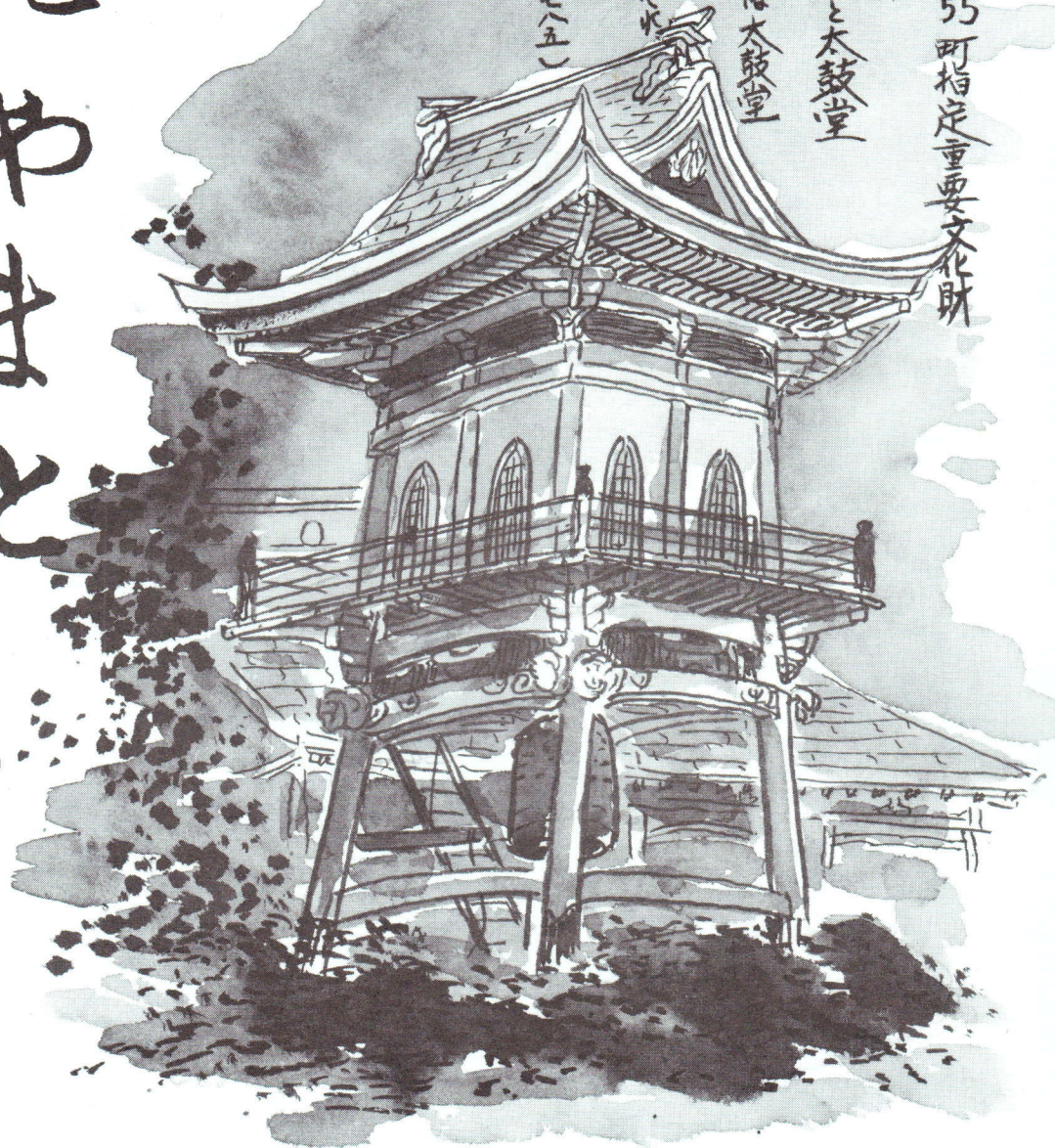


# 史苑 やまと

「大和町の文化財」55町指定重要文化財  
古道・西念寺の  
鐘堂と太鼓堂

下層は鐘堂で上層は太鼓堂  
上層の壁面には二面  
にニツの花頭窓が、それ  
ぞれにある。  
太鼓には天明五年（一八一五）  
の銘あり





## 郡上郷土史研究会のこと

会長 石神堯生

前回平成十八年五月発行の『史苑やまと』第6号で、本研究会は「大和町郷土史研究会」となっておりますが、郡上郡の町村合併による郡上市発足にともない「郡上郷土史研究会」と改名しました。元より会員から研究内容に至るまで、大和町にこだわることではないですし、今後更に広く会員をつのり研究中也を広げるために、「郡上郷土史」と冠を広げたわけです。

さて、前回ご紹介しましたように、会の活動のひとつとして、足かけ三年大和町の石仏・石碑を撮り続けてきましたが、まだ目標の四分の一にも達しておりません。言うは安く行うは難しですが、それにしても加齢は数秒違わず確実に押し寄せてくるし、それに反比例してことは成就しがたいということになり、これはうかうかしておれないと猛省しております。一方もう一つの課題である『郡上古日記』の講読は、佐藤光一講師の熱心なご指導を受け、遅々とはありますが着実に進んでおります。内容は佳境に入りとても面白いのですが、古文書の講読は物理的にも精神的にも傾注・継続しないと理解が難しくなり、現在残念ながら六、七名の少人数で続けております。しかしいつの日かこれを読みやすい形で製本して、広く市民のみなさまに郷土史の変遷とおもしろさを理解して頂ける日が来るものと思つて、作業を続けておるところです。

この会も次第に会員の高齢化が進み、辞退される方が出て参りましたが、寂しくなりかけておりましたが、年度末にいたつて、「郷土の歴史の勉強をしたい」と入会を申し込んで来られた方が十名ほどあり、大歓迎で名簿に加えさせて頂きました。こうなるとまた、若い方の「歴史を勉強したい」という意欲に応えるために、本当に為になるしかも面白い活動を開拓しなければと責任を感じております。

最後になりましたが、昨年七月、明建神社の「なぬかび祭り」にあわせて、千葉県東庄町ほか近隣の三十名近くの方々、大和町及び八幡町にお越しくださいました。いつものことながら、東庄町の方々の我が町に対する思い入れの堅さには敬服するばかりです。私たちもご恩返しや返礼のために、是非ともご当地を訪問しなければと昨年から検討を重ねて参りましたが、諸説・諸条件がかみ合わず、今年（二十年）春は実現しませんでした。何とか形を変えてでも、東庄町訪問を実現したいと念じております。

# 達人・常縁公の 篠脇城恢復に関する私論

エール  
杉田 理一郎

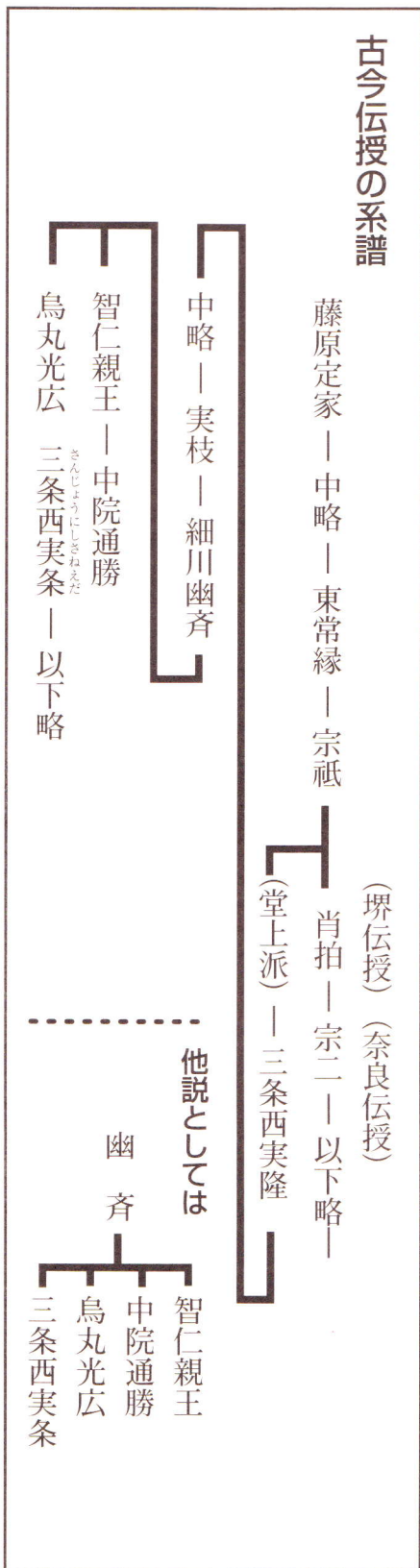
表題に関しては、私は大和町の説を一〇〇%支持する。とくに通史編上巻三八一頁以降で「一般にこうした話は架空のものときされ、せいぜい伝説程度にしか扱われない」とされながらも俗説を否定し、明解に理論構成されていることはすばらしく、KOD（勝手に応援団）としてエールを送らせていただく。次に、杉田説の第一話を二つに分ける。一つは司馬遼太郎の『街道をゆく』第四巻の『室町武家のこと 郡上街道』の一節である。この本は先生の代表作の一つで、毎週の『週刊朝日』に連載さ

れ、ある程度まとまると朝日新聞社から単行本として出版されたことはご承知の通りで、計四三冊に達したという。私の計算では、この本は昭和四七年一月末〜二月早々に発表されている。丁度三〇年前である。

まず申し上げたいことは、先生の史料収集には定評があるが、その先生が全く疑ってもいない・・・実に素直に肯定しておられることと、室町の武家貴族が持つ雰囲気がよく出ているので、是非御紹介したかったからであるが、その一節である。

その二は、表題に基づいて、若干の史料（杉田説）にふれた。この項と第三話は、拙著『私説 郡上の里の物語』（昭和五二年五月）の要約である。尚、マス目を節約したので多くを省略している。傍線、傍点は筆者である。

## 古今伝授の系譜



◎系譜については大和町説が正しい

その一（前に申し上げた通り、街道をゆくの一節である）

―前略― 東常縁は、留守中に自分の城も領地も齊藤妙椿に押領されてしまった（⑩応仁二年―一四六八―）ことを関東で知り、

―無念と言ふもおろかなり。（鎌倉大草紙）―

と、述懐した。この報をうけたとき、常縁はたまたま亡父の追善の供養をしていたときで、僧たちがいたく同情した。

しかし常縁は法要をつづけさせた。その言動のおだやかさにひとびとはいよいよ同情した。

このいきさつは、「鎌倉大草紙」に出ている。この記録は室町時代のある時期（一三七九―一四七九）での関東の政情について年代を追いつつ書かれたもので、筆者はわからない。

そのなかで、城地をうしなつた常縁がなげく言葉に、

「此所（美濃国郡上）は常縁が先祖、中努なかのつとむ入道にゅうだう素遅すぢが、承久二年、初めて拝領の旧地なり、代々十世に及びて終に他人は知行せざりけるを、我が代に至りて思ひの外に東国に下向してか様に成行きける事」とあって、「無念と言ふもおろかなり」とつづく。

常縁のこのなげきは、その後の元龜・天正のあらあらしい戦国人のなげきではなく、いかにも室町武家の典雅さがあり、いはば室町風の教養人らしいなげきの姿勢であつたと思える。

でなければこれが押領した側の齊藤妙椿に伝わったときに、妙

椿が教養人として反能し、

「もつともなことだ」と、敵ながら同感するはずがなかった。妙椿が、鎌倉大草紙のなかで以下のようにいう。

「常縁はもとより和歌の友人なり、今関東に居住して、本領かくなりゆく事、いかにいかに本意なき事に思ひ給ふらむ」

妙椿は、自分も常縁をも劇中の人に仕立てているようで、まるでひとごとのようにそう言う。さらに妙椿は、

「我も久しくこの道（歌道）の数寄すきなれば、いかで情無き振舞をなさんや」

自分も歌が好きである以上、どうして人情のないふるまいをしよう、という、妙椿、つづけて、

「常縁どのが、歌を詠んで送つてくださるならば、所領をもとのようにお返ししよう」と、仲介者にいった。

常縁はその言葉を関東でできき、さつそく十首の歌を詠んで送つた。歌は、鎌倉大草紙に遺っている。

堀川や清き流れをへだてきて住みがたき世を歎くばかりそ  
たよりなき身を秋風の音ながらさても恋しき故郷の春

といった調子で十首つらねられている。

齊藤妙椿はこの歌をうけとって、さつそく返歌を詠んで送り、

返歌とともに城も領地も返した。歌十首で城と領地をとりもどしたというのは、それを原稿料だとすれば東常縁は古今でもっとも高い稿料をとったことになる。室町期は日本の歴史のなかでもっとも文化意識の高まった時代であった。平安期の文化はよくいわれているように王朝貴族が独裁し、くだって鎌倉期になると時代の主人は武家になったが、しかしかれらはまだ自分の領地の田の泥にまみれていて野趣からぬけ出せなかった。室町期になって、常縁や妙椿という在郷の武家のあいだにまで文化が滲透し、自分の行動の規律を、利害よりときには文化意識で決しようという例があらわれてくる、その好例といつていい。――以下略――

## その二

以上のように、教養人の美意識で済めばいいが、郡上の立場でもう少し考えてみたい。即ち妙椿は一年後の文明一年（一四八〇）一二月に亡くなるが、『長興宿禰記』なる文書には、

―後聞、今日、美濃国守護代齊藤地世院（号三位）死去（年七〇才）、此者一乱中種々張行、于レ今東近国煩不レ休、今出川大納言殿義躬卿 奉ニ扶持一、于レ今御在国、如レ此之間、於ニ死去者、世間靜謐之由有レ其沙汰一者也。―とある。

妙椿が死んだから世の中が静かになった―とは一寸ひどいが、その分、味方にとっては頼もしい良軍師であった―と言えよう。

その妙椿が世の賞賛を受けて篠脇城を返還したということは、郡上の占拠を続けているよりも、東氏一族を傘下に組入れ、更に

公卿社会の与論を味方にする方が、政略、戦略共に有利である―と判断したからであろうが、詳しくは史料不足である。

そしてそれには、人間的なつながりも大きかったのである。常縁が居城を回復した四年後の文明五年（一四七三）、前関白（さきのかんぱく）一条兼良（かねら）は、美濃国守護代、革手城主齊藤妙椿に招かれて美濃に下る。両者は以前から親密なつながりがあったし、宗祇も度々妙椿を訪れている。そして人々の共通項は連歌（和歌）であった。

兼良は故実の研究から古典までを学び、和漢ノ才学比類ナシと評されたが、この門を叩いたのが宗祇や三条西実隆で、とくに実隆は、歌集の『雪玉集』や『詠歌大概抄』を著し、和学の後継者となる。更に歌道にも詳しく、香道の祖となったことは御承知の通りである。

これを宗祇の立場でいえば、常縁は師であり、同門の実隆は古今伝授では弟子となる。

そして学問の師であった兼良と妙椿は親密な関係で、宗祇自身妙椿とは旧知の仲であった。

その妙椿が師である常縁の城を奪ったのである。即ち、被害者の常縁と加害者の妙椿は旧知の仲で、両者の間に宗祇が存在し、其々深いつながりがあったが、これらはその一部にすぎない。

次に無視できないのは、東家から京都五山へ送った多くの傑僧の存在である。

彼等は南都北嶺の学僧ともつながりを持ち、又、公卿社会とも

懇親が深く、文学的なサロンを作っていた。生家の苦境に当たって猛然と運動を開始したと考えていい。そして、

この危機を、一滴の血も流さずして居城を恢復した常縁の手腕は空前絶後の絶妙さであったが、古今伝授を継いだのは宗祇であった。……。

ここまで申し上げれば、大体の構造が見えてくるのではなからうか……即ち、その宗祇は連歌という合鍵を以て、上は堂上公卿衆から、下は土豪の館、ひなびいた庵の主まで、融通無碍に交わった……しかも、身分からして一杖一笠を常とし旅を生活としていた。鎌倉大草紙（郡上郡史一二二頁・傍線筆者）の一節に、

—あるがうちにかかる世をしも見たりけり

人の昔のなおも恋しき

浜式部少輔春利此歌を聞てあわれにたへず思ひければ、京都へ使ありける時、兄の浜豊後守康慶が許へ書て送りける。

康慶此歌を感じて歌を好む人々に見せてはやしければ、斎藤妙椿聞て常縁はもとより歌の友人なり。—以下略—

私は右の、人々に見せてはやしければ、—を、与論を展開して篠脇城恢復のための条件を作ったのだ—と考えている。

当時は「与論」という言葉も思想もなかったことをお考え願いたい……そして、右の「京へ（の）使」が宗祇であっても決して

ておかしくはないし、上洛後、宗祇が与論を作ったのだ—と考えてもいいのではなからうか。

#### 宗祇点描

宗祇という人は長い白髯（あごひげ）を持ち、いつも手入れしていたから、その美しさは人目をひいた。

更に、彼は香道にも秀れていたから、その髯をいつも香でたきしめていた—という事は、三条西実隆が香道の祖である以上、この道では宗祇は弟子となるし色々つながりがあった—ことをくり返して申し上げたかったのである。

彼は旅を常とした。

当時の旅は、山賊や海賊に会うことも多い。ある時山中で賊に会った。

宗祇はこういうことには馴れていたから、文字通り一銭残らず与えて、なに事もなかったように足を早めた。

しばらくすると今の賊が追いかけてきて、

「誠にそつじながら、そのヒゲを頂戴できぬか—という。

なぜか—と聞くと、京では禪僧が扠子（そ）というものを持っているが、それは白熊の毛で作った舶来品で値段も高い。故にそのヒゲを頂戴して京へ持って行けば、高く売れるだろう—というのである。これには宗祇も恐れ入って思わず

わがために私子はつすばかりはゆるせかし  
ちりの浮世を すてはてるまで

と詠んだ処、賊も多少は歌心があったのであろう、感動して許しを乞い、先程奪った錢も返し、更に安全な所まで送りとどけたという。

山賊を業とする人物までが歌心を持っていたという和歌の普遍性を、室町時代の一挿話として申し上げた。

(余話として、司馬遼太郎 文芸春秋社刊の内の浪人の話の一節を要約した。)

## 第二話

常縁が居城を恢復した九〇年後の永祿二年(一五五九)、東氏は八幡の赤谷山城(東殿山)に敗亡するが、当時の様子は前論東氏衰亡期の風景に書いた。その時、

嫡流常堯は飛驒国白川の帰り雲城の内ヶ島兵庫の許へ逃れ、尚胤(素山)は越中国の椎名康頼を頼ったこともふれた。

その一

遠藤家御先祖書(写・八史〇七頁)の一節によると、

—寿昌院素山越中在国之時歌道達人故ニ公方義輝公御師範ト被成  
永祿七年十月五日御内書並竹内三位殿御書を添御上京御催之所同

八年五月公方御横難ニ付御上京有之一以下略・傍線筆者—。

②ここでいう公方御横難とは、將軍義輝が京の居宅で、大和信貴山の城主、松永弾正少弼久方の反逆で殺害されたことをいう。時に永祿八年(一五六五)五月一九日のことであった。

その二

同じことを、遠藤記(八史〇二四頁)に求めると、

—東素山越中在国書状之古文の一節に、—前略—、初メ当東山殿御代公武歌道断絶候処勅定ニ依而東下野守常縁朝臣上洛関白殿近衛内大臣殿三条右大将義尚常徳院殿ニ常縁御師範被致天下歌道再興之事日本国中其隠れなし、是東家之規模たる所也、任先例可致上京旨去々年十月五日御内書被成並ニ竹内三位殿御書相添られ彼足絶家の而目たるべきか己ニ上洛ヲ催候所將軍義輝公不慮之横難御他界天下及乱事一身歎愁涙ニ沈むの余り

大かたの袖だにしぼる五月雨に

雲井の外もはれがたの世や

—以下略・傍線筆者—。

家門を再興しなければならぬが、そのためにも尚胤の上洛を必要とし、それは先例によるのである。即ち、

この先例とは、常縁公の篠脇恢復の際の上洛を指しているが、当時のことをくり返して言えば、居城恢復の約束はすでにできて



いたが、京が天下の視点を集め、情報の集散地なるが故に、篠脇城の返還は京でなければならなかったのである。即ち、

一つは公卿社会が返還の与論を作ったからであり、斉藤妙椿としては純粋な損得なしの返還であつて、絶対に利敵行為ではないことを、天下に示す必要があつたのである。

世は応仁の乱の最中であつたことをお考え願いたい。

次の、常堯の代に起こつた東氏の大難は、京（公卿）の立場から言えば、これ以上の不都合が生じて、東氏代々の秘伝や口伝が散逸してはならないが故に、尚胤を上洛させて今の内に教えを受けておきたい――

ということでもあつたらうし、東氏側からすれば、居城恢復のためにも京の勢力を味方にし、合わせて前例に基づいて、与論を作らなければ――ということであつたらう。

これは第一話の、人々に見せてはやしければ――につながると思うが如何であろうか、即ち常縁の故智に習つたのである。

いずれにせよ、將軍の悲運に伴う遅れもあつたが、二六年後の天正一三年（一五八二）一月の大地震の際、飛騨白川の、帰り雲城の崩壊で、東氏一族を含む五〇〇余人の圧死と共に夢も崩れた……無情である。

## 第三話

関ヶ原の合戦（慶長五年 一六〇〇）の前夜、西軍の謀將石田三成は大垣城に拠つて家康要撃の策を練つていたが、一方、兵を分かつて東軍方の諸城を攻撃していた。

伊勢路に入つて阿濃津城を攻め、他の一部は近江の大津城に京極高次を包囲する一方、遠く丹後国宮津の田辺城を囲んだ。

西軍一万五〇〇〇の大軍が田辺に迫つたとき、細川幽斉の嫡男忠興は主力を率いて家康の傘下にあつた。

兵を遠く外征に出している間に大敵を迎えるとは、なんと篠脇城のときと似ていることか――。

ときに幽斉の手兵僅かに五〇〇、城の大橋を引いて籠城、激戦を重ねた。しかし、兵力に於て隔絶する城の敗色が濃くなると、幽斉は八条宮に一書を奉じ、

「武門に死する我身は軽しとするも、歌道に生きる我身は重い、討死の前に古今伝授をゆずり残したい」――旨を伝奏した。

絶妙の人選である。即ち、

八条宮とは時の帝、御陽成天皇の御弟君、智仁親王である。

温厚な人柄はよく人に慕われ、歌道に秀れた当代一流の教養人であると同時に、創造性も豊かであることは、日本のワビ、サビを加味した、桂離宮の創始者であると申し上げれば御理解願えるであらう。

しかも、かつては秀吉の「猶子」でもあられた。猶子とは「猶子ノ如し」から出た言葉で養子と同意語である。

只、養子の場合には養家の姓を名乗り、養家に住むのが普通であろうが、猶子の場合にはそれ程強制されない——精神的なつながりの方が大きい——程度の差といえよう。

ソモソモを言えば、秀吉は天下統一のあと、源頼朝に習って幕府を開こうとしたが、征夷大將軍でなければ幕府を開くことができないう前例があり、征夷大將軍になるには源家の嫡流でなければならぬ——という故実があった。故に、

かつて信長によつて放逐されていた前將軍足利義昭の養子になるべく手を打ったが失敗した。それで、

秀吉は氏の長者である近衛前久の養子となつて藤原秀吉と改めて関白に任ぜられ、その後、豊臣の新姓を下賜されて豊臣秀吉と名乗り、のち藤原の籍をぬいたのである。

つまり、公卿として人臣の位を極め、それを背景に武臣を統率したのが豊臣政権であつた。

それはいいが、現実の世界に立脚していえば、大阪の秀頼にとつては義兄に当たり、東の家康に対しては時の帝の御弟君で、公卿世界の第一人者であられた。しかし、

現実に砲煙の渦巻く田辺城の戦いは、我国一〇〇〇〇年の伝統(精神)芸術の存亡を賭けていたが、五〇〇対一万五〇〇〇、城の命脈は迫っていた。

八条官は幽斎の窮地に驚きたまい、帝を動かして勅使の御査遣を乞い、大納言三条西実条、中院中納言道勝を大阪へ、現地に烏丸中納言光広を下され、

「歌道伝統のため、細川二位法印が一命のつづがなからむように致すべし」の勅語を賜つた。

三成も勅命をかしこみ、早馬をたてて寄せ手の引揚げを命じたが、追撃を怖れて、さしもの大軍が進退両難におち入つた。

かく聞こし召された帝は、更に三条西実条を田辺城に使わされ「敷島の道のその身と共に亡ぶことを深く御軫念あらせたる、速やかに勅を奉じ、とくこの城を去り一身を保つべし。」

との御詔を賜り、幽斎、天恩のかたじけなさに地に伏して泣きくずれた——と伝える。

勅詔のまま、籠城六〇余日の後に開城するが、この間に関ヶ原の合戦は東軍の勝利に終わったので、僅か五〇〇の兵を以て関ヶ原で戦つたであろう西軍一万五〇〇〇の大軍を支えた結果ともなり、更に世の賞讃をあびた。——以下は略す

## おまへ

以上に共通するのは、古今伝授の継統者である三人がいずれも武將であり、且、居城防衛戦に生命がかかつていたことである。

即ち、古今伝授自体が存亡に直面していた。

本論は、篠脇城を失った常縁公が、一兵も損することなく見事に恢復して、それも世の賞讃をあびて、古今伝授の伝統を見事に守ったし、故に私は表題に「達人」の文字を選んだのであるが、御理解願うために二つの史実を御紹介した。即ち、

第三話の田辺城の幽斉は、我国が如何に歌学―その中心は精神的にも古今伝授であった。故に、

それを救うために公卿社会は皇室を中心に一丸となったことに御注目願うために書いた。そして第一話と第三話を結ぶのが、第二話であつて、史料としては二点残るが、その一つの「遠藤記」には明らかに、

○歌道断絶に及ぶ処・・・勅諭（天皇の御言葉）によつて常縁は上洛・・・関白殿、近衛内大臣殿、右大将（將軍）義尚公等の師範になられ―こうしたことを含んで古今伝授の系譜が守られた―ということと、次は、

○右の先例があるから、素山に上洛して將軍の師範（つまり、公卿や皇室を含む師範）―になられるべく手配中の処、義輝の横死によつて事は成らなかつた―というのである。

以上を整理すれば、常縁は城を恢復するに当たつて、まず公卿社会に働きかけたが、それは將軍や皇室にまで及んだ・・・しかし、京を熟知している常縁にとつては計算済みであつたらうし、すべてを見透した上でのことであつた・・・ということを申し上げ

げたくて、私なりの推考を構成した。

すべては常縁公の「神算」によつたことは申すまでもない。

合掌

## 天正大地震と郷土

白石博男

### 「莊嚴講執事帳」の記事

天正十三年（一五八五）十一月二十九日深夜、大地震による大規模な山崩れが起こり、飛騨白川郷の保木脇地区にあった戦国武将内ヶ島氏の居城帰雲城が、城下町ともども、一瞬にして崩落した土砂の地中深くに埋まり、城主内ヶ島氏理一族をはじめ領民五〇〇余人はことごとく埋没・死亡した。

この地震は、北陸から中部、近畿にまたがる広い地域に被害をもたらす大地震であったため「天正大地震」と呼ばれ、飛騨では白川谷が最も激甚であったため「白川地震」とも呼ばれる。

この天正大地震による帰雲城埋没の惨事について、同時代に記録された一級史料は非常に少なく、長滝寺蔵「莊嚴講執事帳」と東本願寺蔵「貝塚御座所日記」の二つしかないようである。

まずはじめに「莊嚴講執事帳」の記事を取り上げる。

「莊嚴講執事帳」は、長滝寺（郡上市白鳥町長滝）に残る史料で、鎌倉時代宝治二年（一二四八）から江戸時代末慶応四年（一八六八）まで約六〇〇年に及ぶ白山中宮長滝寺における莊嚴講執行の

当番帳で、全十一冊が残り、史料的价值が高く、岐阜県重要文化財に指定されている。天正大地震についての記事は、このうち第二冊の中にある。

「干時天正十三年乙酉十一月廿九亥子刻ニ、大地震初候而、

十二月廿五日迄夜昼ユリ申、已来春迄何程ユリ可申哉不存事

共、白河帰雲両山打崩内嶋殿氏理其外五百人余、牛馬等迄一

時ニ死申候、彼処にても小白河丸山ミゾウレ帰雲同事、其外

江州左保山長ハマ尾州河内越州北莊ツルカ日本国中在々所々

及滅亡候、先代未聞ニ候、然共当寺本尊社中已下諸人一人モ

無何事、被致祈祷を候間、神恵不思議と難有と万人申触候也」

大意は、天正十三年十一月二十九日午後十時〜十二時ころ大地震が始まり、十二月二十五日まで昼夜揺り動き、翌年の春まで数えきれぬほどの地震があった。この地震で白川・帰雲両山が崩れ落ち、内ヶ島氏理ほか五〇〇人余、牛馬にいたるまで一瞬にして死亡した。そして小白河・丸山・みぞれ（明宝）も帰雲と同様であった。この地震で近江左保山・長浜、尾張、河内、越前北の庄・敦賀など、日本国中在々所々で大災害を受けた。前代未聞のことであった。しかし、幸い白山中宮長滝寺では、本尊以下一人の罹災者もなかった。それというのも祈祷のためで、神の恵みが不思議で有難いことだとみんなが語りあった、というのである。

## 「貝塚御座所日記」の記事

次に、「貝塚御座所日記」（「宇野主水日記」のうち）を取り上げる。

天正八年（一五八〇）三月、織田信長と十年にわたり石山戦争を戦ってきた本願寺顕如は、ついに信長と和議を結び、石山（大坂）の地を退去し、紀伊の鷺森に移った。和議を結んだとはいえ戦国武将が相手であり、いつ再び攻められるかわからない。そこで防戦に都合のよい地を選び、雑賀門徒の武勇を頼みとして紀伊に移った。武備は解いたが、以後は表面において各地の武将と平和な関係が続けながら、裏面では武将の挙動を偵察し万一の用意をしていたのである。

石山戦争の潜伏状態といえる天正八年三月から同十一年六月まで鷺森在住の三年間及び貝塚移住後のことについて、この時期に顕如上人の右筆であった貝塚願泉寺住職宇野主水道喜の手記が、証如上人の「天文日記」とともに本願寺に伝えられ、石山退出後の本願寺に関する貴重な史料となっている。鷺森時代の手記は天正御日記とか鷺森日記と呼ばれ、貝塚移住以降の事を記した分が、貝塚御座所日記、貝塚御座所雑記の二冊となっている。貝塚御座所日記は、天正十一年より十四年十二月までの事を大略年月を追って記し、貝塚御座所雑記は、事件を中心とした記録である。

宇野主水の鷺森日記は西本願寺に、貝塚御座所日記及び同雑記

は東本願寺に残っている。このうち貝塚御座所日記の中に、天正大地震についての記事があるのである。

「貝塚御座所日記」は、残っている部分がたまたま、天正十一年七月から天正十四年十二月までで、天正十三年十一月の天正大地震の記録が紹介されている。偶然とはいえ、「莊嚴講執事帳」と並んで、非常に貴重な史料である。

「一、天正十三年十一月二十九日夜大地震ニ、京都三十三間ノ堂ノ仏六百体ト云々、イヅレモ倒給ト云々

一、飛州ノ帰雲ト云在所ハ、内嶋ト云奉公衆アル所ナリ。地震ニ山ヲユリクツシ、山河多セカレテ、内嶋ノ在所へ大洪水ハセ入テ、内嶋一類地下人ニイタルマデ不残死タル也。他國へ行タルモノ四人ノコリテ、ナクナク在所へ帰タル由申訖（おわんぬ）。彼在所ハコトゴトク測ニナリタル也、近江・越前・加賀別而大地震。和泉・河内・摂津同前。六十余州大地震同前也。サレドモ別而破倒タル国ト、サホドニナキト差別在之云々。一々難知之。不及注之者也。八十余歳之老人モ如此事、見聞タル事無之云々」

### 天正大地震の規模と被害

天正大地震の規模は、被害状況などから、マグニチュード七・九あるいは、八・〇〜八・一だったと推定されている。

天正大地震は、活断層による直下型の大地震で、濃尾大震災に

も匹敵する規模であったと思われる。震源とされる御母衣断層は、富山県平村から白川村を庄川に沿って南下し、保木脇を経て郡上市明宝北部まで、長さ約八〇キロにわたって連続する大断層である。また、その延長上には、益田郡下呂市萩原町北部から恵那東部に向かって走る阿寺断層がある。最近の調査で、この阿寺断層も同時に動いたとする証拠も見つかっており、さらには烈震地域が極めて広い範囲に散在している点で、天正大地震は飛驒と近畿の二つの地震がほぼ同時に起こったとする見方もある（岐阜新聞社『岐阜県災害史』等）。

『日本地震史料』（毎日新聞社、武者金吉編、一九四一）は、この地震による帰雲城埋没について次のように記している。

「亥の刻、飛驒白川谷の保木脇にて大山崩れを生じ、帰雲城埋没され城主内ヶ島氏理以下多数圧死を遂ぐ。山崩のため白川堰止められ、庄川水通ぜざること約二十日、白川谷全部にて倒潰、或は埋没三百余戸」

また、『日本災害史 2 地震・津波』（日本図書センター、二〇〇一）は、次のように書いている。

「一五八六・一・一八（天正一三・一一・二九）M七・八 飛驒白川谷で大山崩れ、帰雲山城、民家三百余戸埋没し、死者多数。飛驒・美濃・伊勢・近江など広域で被害。阿波でも地割れを生じ、余震は翌年まで続いた。震央を白川断層上と考えたが、伊勢湾とする説や、二つの地震が続発したとする

説などがあり、不明な点が多い。伊勢湾に津波があったかも知れない」

天正大地震は、畿内・東海道・東山道・北陸道の各地に多くの被害をもたらした。『日本地震史料第一卷』（東京大学地震研究所、一九八一）等によって、この地震の被害を略記する。

越中 山崩れが起こり、庄川が約二十日にわたってせき止められる。砺波郡木舟城が陥没し、城主前田秀継夫妻も死亡。

なおこの木舟城陥没をもたらした地震は、二十九日の天正大地震とは別の二日前の十一月二十七日の越中地震であるとする説もある。

飛驒 白川村保木脇の帰雲城及び城下が埋没、城主内ヶ島氏理以下領民全員死亡

三方崩山ほか多数の山崩れが起こる。

益田郡下呂町竹原の威徳寺七堂伽藍が倒壊焼失

美濃 大垣城が全壊焼失

白山中宮長滝寺三重塔が大破

嘉永六年（一八五三）に白山中宮長滝寺が郡上藩に提出した「長滝寺三重塔再建願」（『白鳥町史史料編』若宮家文書）に「天正十三年酉年之大地震大風ニ而吹倒レ置置候二付、今ニ礎戸前等も有之」とある。なおこの再建願は差し戻され、再建は実現しなかった。

三河 岡崎城が大破

尾張 甚目寺の法性寺、一宮真清田神社などが倒壊

伊勢 長島城が全壊。泥土化、湧没が多数起こる。

宇治山田外宮が破損

近江 長浜城が全壊、城主山内一豊の息女与祢姫圧死

「御家伝并御武功記」(『山内家史料』)に、「十一月廿九日

於江州長浜宇内大地震、山川転動裂壊家屋転潰長浜之御城

殿崩、与祢姫様喪亡御歳六歳、号光景妙円是見性院様御腹

の子也、此時御家人乾彦作和信を始数拾人死す」とある。

京都 三十三間堂の仏像が倒れる。八坂神社拜殿・鳥居が破損。

壬生地蔵堂が倒壊

大和 多聞院築垣が崩れる

### 帰雲城埋没についての古記録

その当時記録された一級史料のほかに、以後(江戸時代)に書かれた古記録がいくつもある。

#### ①『飛驒鑑』(複写本岐阜県図書館蔵)

「内ヶ嶋之前大川有之候、其向ニ高山御座候、而亦其後ニ帰り雲と申高山御座候余り高山故常に雲山に当り跡江帰り申候ニ付而帰り雲と申候、右之帰り雲之峰ニツニ割れ、前之高山並大川打越内ヶ嶋打埋申候、一人も不残内ヶ嶋之家断絶」

内ヶ嶋の居城である帰雲城の前に庄川があった。その向こう側

に高い山があり、その高い山のうしろに帰雲山がそびえていた。

その帰雲山の峰が地震で二つに割れ、大量の岩石、土砂が庄川をふさぎ、手前の高い山と庄川を越えて、対岸の帰雲城とその城下町を埋めてしまった。内ヶ嶋氏と住民は全滅した、というのである。峰の割れ方、削りとられた窪みの面の方角、今も帰雲山の手前に、二つの「高山」ような峰があることなど、現場の状況を比較的正しく表現するものと思われる。

#### ②『神岡町史特集編』所収の『飛驒略記』

「雷電霹靂し、烈風枝を碎き暴風魂を破る。日月の光を失ひ昼夜不分事七日、時に天正十一年十月(ママ)二十九日、大山崩れ落ちて帰雲・水沢上の両村一時に滅亡し民家悉く地底に埋れ、老若男女更に残る者なしと也」

#### ③『神岡町史特集編』所収の『飛驒太平記』

「天正十三年十一月廿七日(ママ)、此帰雲の城下並に越中利波郡、大地震にて山川も崩れ、即利波郡木船の城も、揺り動き潰れけり。此時木船の城主は前田左近大夫秀継入城遣はし、大地震度々ゆれて大地も割れ、百千の雷も響かして、木船の城を三丈斗もゆり沈め、家々倒るること数知れず、庄川の川上にて山一つ崩落ち、庄川の水口をふさぎ、前後二十九日大川の水を堰止め、山々洞々へ水溢れ、庄川は川原となりしゆへ、鮭・鱒その外小魚捕取事自由なり。百姓共金沢・高岡・石動山の辺へ持行き、売代るなして金銭を得る事多分也」

④「飛驒国中案内第三卷」

「然に其夜俄雷天稲妻しきりにて、降雨はしのをつくごとし。去程に城内より川東の大山崩れて、氏理の居城は不及言二其近辺不残打つぶし、大山崩落て白川の大河水切水ささへて城下より上は海のごとく、川下の村々不残押破、村方の者共取物取合ず皆散々に山へ逃上り、前代未聞の事共也。神罰天罰即時に難遁。往昔は帰雲、其後は帰山なり。今に至て其所を帰雲川原と言ならし候」

帰雲城埋没情報の伝達

ところで、「貝塚御座所日記」の筆者、宇野道喜は、このまれにみる大災害を人づてに聞いたのであろう。末尾の部分で、白川から他国へ出かけていたものが四人いて、災害の知らせを聞いて戻った在所は「測」になっていた、とある。せきとめられた庄川が、埋没地点から上流に、巨大な測となっていたのである。

このことに関連して、次の史料に注目したい。

「飛驒大平記」(『神岡町史特集編』所収)に、

「その頃あこ(この書の別箇所に「白川郷帰雲の城下をあこといふ」とある)の城下の商人に、常々売物を越中へ出せしもの六人、折しも正月商物仕入のため、富山へ出て居たりしゆへ、漸く此者斗り命助りしゆへ、彼のあこへ帰りて見れば、

有りし城下の跡形もなく、何れか有りし処の居宅やらん、親子一門一人もなく、残らず千仞の土底へ埋められて、変り果てたる有様、思へば涙も留りかねしに詮方もなく、又々富山へ立帰り六人の者共、富山にてからき浮世を渡りけるが、折ふし寄合ふ毎に老父・老母の事共、或は一家一門の事共申出で、涙の乾く隙もなき、誠にいたましかりける事共也」

加賀・能登・越中三か国の地震を記録した金沢前田家所蔵「三壺聞書(三壺記ともいう)」(飯田汲事『天正大地震誌』所収)には、次のように記されている。

「又飛驒国阿古白川と云所は、在家三百余軒の所なり、其時の地しんに、高山一つかけ落て、白川三百余の家の上に落懸りて、数百人の男女も家も三丈許の下に成、在所の上は草木もなき荒山とぞ成にけり、折しも霜月下旬之事なれば、常に商売物を富山に出す商人は、六人富山に有之て命たすかり、行て見れば白川のとちかたちも替り、いづれの程が在所の有所にてあらんと、なみだとともに富山へ行にけり」

また富山県側の史料として、「越中国名跡志」(『白川村史』一部所収)にも、

「此地震にて他国の事ながら飛州白川と云所は民家三百余の家の上へ落懸て、家は三丈許の地の下へ沈みければ、数百の男女も地下へ沈で、白川の村は枯葉もなき荒山と成、霜月下旬の事なれば白川のもの六人富山へ売物に行命助り、白川へ



帰りて見ればあとの形はかはり、何れは古里のあとならんと泣々又富山へ戻りけり」

とある。富山へ物を売りに出かけていた六人だけが助かり、白川に戻ったがどうしようもないので富山にもどってきた、とあるのである。六人と四人（「貝塚御座所日記」）の違いは、それほど問題ではない。複数の生存者の口から、この惨事が情報として伝えられたことが注目されるのである。情報は遠くへ伝わってゆくほど、少しずつ内容が誤伝されてゆく。

帰雲城埋没の情報は、四人あるいは六人の物売りが、第一報を越中に届けたのだと思われる。これらの史料には「泣々（ナクナク）」「涙も留りかねし」という類似の表現があり、「貝塚御座所日記」とこれらの史料の情報源は同じであったと推察される。

## 帰雲城と内ヶ島氏

帰雲城は、内ヶ島為氏によって築かれ、雅氏・氏理三代の居城であった。

『飛州志』には、次のように記されている。

「帰雲城、同郷保木脇村ニアリ、内島上野介橋為氏寛正年中築之、其子上野介雅氏兵庫頭氏理等居之、国説曰内島ハ本苗楠氏和田七郎橋正氏ノ後裔タリ、白川郷ニ於テ甚ク猛威ヲヒテ近郷ヲ押領セリ、足利將軍家ニ奉仕ス、同郷照蓮寺本願寺

宗九世積明教等モ此時ニ討亡ボサレタリ、然ルニ兵庫頭氏理ガ時天正年中地震ニテ大山頽落城廓滅却シテ人馬皆死亡ス、於茲内島家断絶スト」

この『飛州志』や『斐太後風土記』によると、室町時代の寛正年間（一四六〇～六六）内ヶ島為氏は、將軍足利義政の命により信州より白川郷へ入った。はじめ牧戸城を築いたが、のちに白川のほぼ中央にあたる保木脇に帰雲城を築いてこれに移った。

内ヶ島氏は、越中砺波郡の方まで勢力をのばし、中世飛騨における有力な武将の一人であった。現在、白川郷の中心集落荻町にも城址があり、これは内ヶ島氏の家臣山下大和守氏勝の居城であったと伝える。一方、上流の牧戸城では、勇将川尻備中守氏信がいて、東南の守りを固めていた。

## 祝賀の能興行前夜の大地震発生

『飛騨鑑』に次の記事がある。

「内ヶ嶋兵庫於越中金森乱入之注進を聞届早々帰陣申候得共、最早一國弓矢相済國中悉金森江隨申ニ付而、無是非家老七八人其外侍分彼是八十八人召連高山江罷出金森江降參被申入候。・・・兵庫も即刻在所江帰宿領分之者共出合悦申事難尽申候、兵庫も不慮に二度面々江逢候事大慶不過之候、然は祝儀ニ能申付面々へ致見物此中之苦勞払させ可申由二而越前より

猿樂共呼寄領分之者どもも内ヶ嶋へ揃明日能興行之前之夜九  
ツ過、内ヶ嶋之前（以下前掲の大地震の記事に続く）」

内ヶ嶋氏理は、三年前の天正十年（一五八二）から越中富山に  
出兵していた。越後の上杉景勝が越中に乱入したので、内ヶ嶋と  
同盟関係にあった椎名・佐々を応援するための出兵であった。天  
正十三年までの四年の間、ずっと出陣していたのか、途中白川に  
もどり再度の出兵であったのかは不明であるが。

それまでは内ヶ嶋百二十年、白川郷での戦争はほとんどなく、  
他国への出兵もまれであった。戦国の中にあつて、内ヶ嶋氏は飛  
騨白川郷を守り続けてきたのである。

地元を留守にしている間に、秀吉の命を受けた金森長近が飛騨  
侵攻を開始し、白川郷に乱入した。内ヶ嶋氏理があわてて帰国し  
てみると、国中がごとごとく金森方になびいていた。その結果内  
ヶ嶋氏理は、金森方に降参、和平を結んだ。和平条件の詳細は不  
明であるが、とにかく白川郷に帰還できたのである。住民たちは  
これを喜び、歓迎したのであろう。

内ヶ嶋氏理の越中出兵四年、降伏とはいえ、白川郷に平和がよ  
みがえった。氏理は、盛大な祝賀会として越前から猿樂芸人を招  
き領民に見物させるべく、「苦勞払い」の能興行を計画した。帰  
雲城内は、明日の準備で賑わい、人々は疲れ熟睡していた。運命  
の皮肉、その夜大地震が襲ったのである。

## 山下氏勝と川尻氏信の運不運

この能興行計画に関連して、天正大地震は、内ヶ嶋の家臣二人、  
萩町在城の山下氏勝と牧戸在城の川尻氏信に、偶然による運不運  
をもたらした。

『飛騨鑑』には、

「家老之内山下大和同弟修理両人は、内ヶ嶋より三里下鳩か  
へと申所在所故罷越能興行之朝未明ニ出仕申首尾ニ而右之  
難ニのがれ申候、」

とあり、山下氏勝は、翌日に予定されている保木脇の帰雲城にお  
ける能興行への出席について、「鳩かへ」（鳩ヶ谷）から保木脇ま  
では三里しかないので、朝立てば間に合うので、当日未明に出発  
することになっていたおかげで、埋没の難を免れたのである。

一方、『飛州志』に、

「向牧戸城、同郷牧戸村ニアリ、内島家臣川尻備中守氏信居  
之、川尻家説日本国近江国多賀氏流飛州内島家ノ長臣タリ、  
然ルニ天正年中内島ノ居城帰雲山ノ城廓大地震ノ為ニ滅亡ノ  
時、氏信モ城中ニ在テ滅亡セリ、其子勘平此時京都ニ遊ビ在  
城セズ、仍テ此災ヲ遁レリ、後金森法印ニ奉仕ス」

とあるように、牧戸城主川尻氏信は、このとき帰雲城にいたため  
に埋没の難に遭遇したのである。ただし氏信の息子は、京都に行っ  
ていたために助かった。

翌日の能興行を控えて、川尻氏信は前夜から帰雲城に泊まり、山下氏勝は当日朝出かける予定であった、という偶然が二人の運命を分けた。この時命拾いした山下氏勝父子は、『飛驒鑑』に、「後大和八尾張二出知行三千石、子市正八尾張中納言様御後見被仰付五千石程ノ身上ニ而御座候処仔細候而近年浪人美濃蟄居」

とあるように、のち一時は出世して尾張の徳川義直の側近になっている。何年あるいは何十年後に発生必至とされる東海地震等の際にも、こうした運不運が私達を何らかの形で襲うことであろう。恐ろしいことであるが、決定的な対処法は残念ながら存在しない。

### 東氏嫡流常堯の遭難

この天正大地震により、舅の内ヶ島氏理の元に逃れていた郡上東氏の嫡流東常堯も埋没した。

八幡町慈恩寺に残る古記録「遠藤家御先祖書」には、次のような記事がある。

「七郎常堯殿ハ縁者之内ヶ嶋兵庫頭氏理を頼ミ飛州白川江没落被致候、其後常堯為真村飯盛山・白鳥烏帽子城江出張リ之処、上ノ保御家来ニ被仰付早速責落候、天正十三年十一月廿九日亥刻大地震ニ而白川帰雲山之山川崩レ、屋形上下ノ者五

百人余一時滅亡、此節常堯も御逝去」

同系統の古記録である「東家遠藤家記録」「遠藤記」（慈恩寺蔵）、「秘聞郡上古日記」（岐阜県図書館蔵）にも、ほぼ同趣旨の内容が記されている。これらの古記録は江戸時代前期に書かれたものである。

永禄二年（一五五九）東殿山の戦いによって、郡上東氏が分家遠藤盛数によって滅ぼされたとき、当主東常慶の子常堯は、妻の父である帰雲城主内ヶ島氏理の元へ逃れていた。その後東常堯は、白鳥の烏帽子山や為真の飯盛山へ進出したりして回復をはかったりしたが遠藤氏に撃退されているうち、この天正大地震に遭遇して埋没したのである。

神路木越城における青年時に行状不良と伝えられ、郡上東氏滅亡後二十数年白川の地で生き永らえていた東氏嫡流常堯は、「泣きつ面に蜂」ともいえる思わざる天災により、不運な末期を迎えたのであった。

本稿作成にあたり、史資料についてお世話になった白鳥図書館のみなさんに感謝します。

# 鶴来橋について

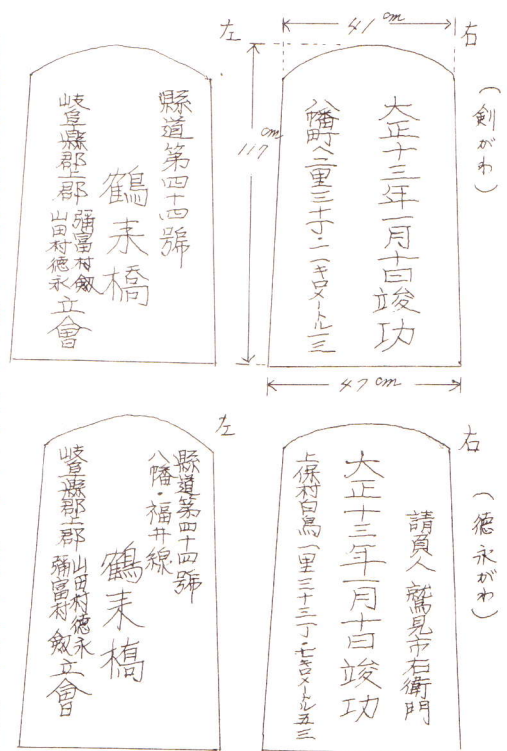
加藤 文蔵

去る平成十九年より鶴来橋の掛け替え工事が本格的に行われて本年三月に完成の運びとなった。この橋は旧山田村徳永と旧弥富村劔の間を流れる大間見川にかかる橋である。八幡方面と白鳥方面を結ぶ重要な県道であったが、その後国道一五六号が橋の東よりに建設され以後急激に交通量も少なくなった。

この鶴来橋が長い間に果たした役割は大きい。往時を知る人々にとつては親しみも格別で橋上での遊びや夏における子ども達の「水あび場」としてもずいぶん賑やかであったことが思い出される。

旧鶴来橋は明治時代に八幡以北越前街道の重要路線で地区の人々の熱心な要望により漸く県道に指定され、その後大正十三年（一九二四年）に鉄筋コンクリート橋として改修された。今回の掛け替え工事では、長い年月を経ている堅牢で重機を使い、大きな鉄球を打ちつけて漸く碎き撤去することができた。

この旧鶴来橋の特徴は、劔がわと徳永がわにそれぞれ四基の大きな石材を使って紡錘形の欄干を支える石柱が有り、次のように標示が刻まれている。



旧鶴来橋は劔地内での唯一の県道にかかる橋で、大正・昭和・平成と実に八十三年間を経ってきた橋である。それぞれの時代の移り変わりを見てきたことであろう、人々の交流は勿論のこと、荷車・荷馬車・トラック・乗合バスなど種々その変貌を見てきたことだろう。中でも戦時中のことであるが昭和十八年頃に金属の回収や供出が行われ橋の欄干に使用されていた太い鉄管が供出され、以後粗悪なコンクリートの代用品でとおしてきた橋である。冬期にはスキー場への観光バスや、重量クラスのトラックなど老骨ながらよく耐えてくれた橋である。

私的なことですが旧鶴来橋は、県道にかかる新しい橋ということで橋中も広くそれに合わせて道路巾も広くすることになり、両

側六十間ほどの土地を提供することになった、幸い私の家の土地であり、後になって県知事名で「：土地の寄附を許可する」の書面が届けられたとあって祖父が笑って話をしてくれたことがあった。またこの橋の請負人鷺見市右衛門に私の母の姉が嫁いでいた。

(現在白鳥町大島 鷺見製材、建築業)

今一つは今回の改修工事で橋を取り壊すことになり、そのため仮橋をつくることになり取り付け場所にあるモミの木が邪魔になるため伐採することになった、このモミの木は大木で径が一メートル余あり樹齢も百年近くで傘状で安定感があった、しかも長年に渡ってこのモミの木は近くの寺院の報恩講の仏花として役立つてきたことから惜しまれたが止む得なかった。

さて新しい鶴来橋は橋巾は八メートル余、長さは二三メートルで前の橋と比べると広くて大きな感じがする。中ほど少しふくらんでおり、橋上の歩道部分も確保されているようだ、橋下の大きな岩場は洪水予防のため一部を残して削り取られ流れもスムーズになったようだ。工事の進める上でこの橋には、電話線、下水道、上水道などが付設されているため工事も長くなったと思われる、昔の橋づくりと違って護岸工事など実に堅固であるので、将来も長くそして災害にも耐えて橋の役目を果たしてくれるものと思っています。



( 橋の歴史をとどめる資料にもなるので関係者の方々の協力を得て新橋に再元させていただきました )

# 戦争と私

石 神 堯 生

## 私の戦争体験

私が住んでいるのは郡上という農山村だから、戦時中でも敵機来襲も空襲もなく、直接には戦争体験はない。おなじ年配の名古屋や岐阜にいた知人達に聞くと、小学校に上がる前後に空襲の恐怖に合った人達が結構居た。なんでも空襲で逃げる最中に死体があるところを歩いてたとか、プールなどに死体が浮いてたとか聞いた。

郡上では空襲警報が鳴ると、夜ならば電気を消して、防空ずきんをかむってそのまま待機していて警報が解除されると電気をつけるといった程度であった。それでも学校でも空襲避難訓練などした覚えがある。なぜか右手で左腕を持ち、喋らないように静かに階段を下りて桑畑に隠れるといった訓練であった。

終戦間近の頃、農村開発隊とか言う軍隊編成の若い兵隊らしき集団が来て、学校に宿泊しながら、地域の河川改修などの作業をしていたことを覚えている。朝学校へ行くと、その人達の朝食の飯盒が講堂の隅に蓋を取って並べてあった。全部同じようにご飯

の上に豆が数粒並べてあった。

隊列を組んで歩いてたが、隊員の誰かがちよつとでも横を向くと、上官らしい人が来てビンタをつた。軍隊の厳しさをかいま見た。上官は引きずるほどの長い軍刀を帯び勲章を幾つも着けて、水戸黄門のような長いあごひげを生やしていた。

私たちの学校は国民学校の分教場で、一年生約二十名、全校児童約八十名。複式もあった。四年生までしか居なかったが、それより上級生は本校へ行っていた。最近と比較すると児童数も多かった。現在は多いクラスで十四、五名、少ないクラスは三名位になっている。

私たちも行進の練習をよくした。「予科棟の歌」若い血潮の予科棟の七つボタンは桜にいきり、今日も飛べ飛べ霞ヶ浦にやでかい希望の雲が湧く」。記憶が間違っているかも知れないが、これを一年生から四年生まで全員で歌いながら、先生の号令に合わせて行進した。先生の号令は「左右、左右」だったが、それが「ダツチミ、ダツチミ」と聞こえたので、私たちは行進のことを「ダツチミ」と呼んでいた。ただしこれは私にとっては国民学校二年生の時の終戦になるまでのことである。

全校集会では教育勅語の奉読があった。全く意味がわからなかったが「チンオモウニ、ワガコウソコウソウ、クニヲハジメルコトコウエンニ、トクヲタツルコトシンコウナリ、ワガシンミンヨクチュウニヨクコウニ」そして最後は「ギョウメイギョジ」

で終わる。これも間違っているかも知れないがそれだけしか覚えていない。当時の子供は殆ど全員栄養失調でハナを垂らしており、着物の袖はハナを拭くので光っていた。教育勅語が始まると、みんな頭を下げなければならぬが、ハナがでるのでそれをすすする音だけがあちこちから聞こえた。最後の「ギョメイギョジ」を待ちかねた。

食事の時は両手を合わせて合掌し、親指と人差し指の間に箸を挟んで「箸取らば天地御代の御恵み、みよやしろの恩を味わえ、いただきます」と全員で合唱した。普段の遊びの中にも戦時色の濃いものがあった。軍艦遊びといって二チームに分かれ相手チームを倒す遊びであるが、チームには航空母艦を意味するタイというのがいて帽子の庇を前にかむつて大将をつとめ、駆逐艦を意味するクチは庇を横にし、潜水艦を意味するスイは庇をうしろにしてかむつた。タイは一人クチとスイは数人である。タイは相手のクチを捕らえる(タツチする)ことが出来、クチはスイを捕らえスイはタイを捕らえることが出来た。速くタイを捕らえた方が勝ちである。この遊びはかくれんぼや鬼ごっこより面白かった。但し子供が数人居ないと成立しない。

父の面会に行ったこともあった。父は私が五歳、弟が二歳の時三十歳(母二十九歳)で召集されて応召したので、父の記憶はほとんど無いが、ひどくしかられて暗闇に連れて行かれ、そのあと

で畳に両手について謝ったことと、父が代用教員として勤めていた近くの小学校へ父の弁当を持って行き、ブランコに乗ったら上級生から怒られたことを覚えている。

面会場所は岐阜の六八聯帯の駐屯地というのか練兵隊の兵舎があるところで、今の岐阜長森中学校に近いあたりだったと聞いている。今のような街並みはなく、広い田園地帯だった。母と伯母(父の姉)について行つたが、伯母が肥溜めに落ちて着物が汚れ大騒動だった。

父に会い、うちから持っていたお菓子などを食べた。そうしている時上官が見回りに来た。父は話の途中でも直ぐ立ち上がり、上官に向かって敬礼したが、上官は全くこちらを向いていなかった。たとえ見られていなくても敬礼をしないと、あとから叱られるということだった。

岐阜からの帰途、美濃太田駅でアイスキャンデーというものを買ってもらった。溶けかけているのを母がハンカチに包んで持ってきてくれた。この世にこんなおいしいものがあるかと思うほどおいしかった。

父はビルマ(現ミャンマー)に配属され、やや小柄で虚弱体質のためか、郵便の任務に就いているということだった。父からはよく手紙が来たし、こちらからは私たち兄弟の写真などを送った。

私の父に関する記憶はここまでである。

## 召集令状・応召

このころ召集令状が来るということは家がひっくり返るほど大変なことだった。父に召集が来たことは、すぐに学校に知らされたらしい。当時の生徒達の話によると、父の召集の話を聞いて、二階で授業をしていた他の教員が、転げるようにして階段を下りてきたというのを聞いている。

応召で出発する前は、集落の人達が神社に集まり、そこで見送ることになっていた。往く人見送る人何人かの挨拶を聞いたが、挨拶言葉はだいたい紋切り型だったのだろうか、みんな異口同音に「あつくあつくお礼申し上げます」と言い、最後は「はなはだ簡単ですが…」で結んだ。これが済むと乗車する駅へ行ってみるまで国旗を振りながら見送った。

子供の頃だから「アツクアツク」は「暑いから言うのか」と思ったが「ハナハナ」は何のことかわからなかった。また大人の言う「カンコノコエ（歓呼の声）」は「下駄の音のことかな」等とも思った。

父の召集令状は、何年かたって二階の古ダンスの中で見つけた。当時「赤紙」と呼んでいたが、今で言うピンク色の少し濃い色をしていた。

薄暗き二階の奥の古箆筒に赤紙残して父は逝きしよ

## 終戦の記憶

第二次世界大戦が終わったのは、小学校二年生の夏だった。今となつては記憶はやや曖昧だが、私たち近所の子供仲間がいつものように外で遊んでいると、誰かが聞いてきたのだろうか「これからラジオで天皇陛下の話がある」ということだったので、みんなが近所で一軒しかないラジオのある家へ集まった。既に何人かの大人がその家の前庭に集まっていた。庭に面した部屋の障子が開けられ、ラジオがこちらに向けてあった。

玉音放送が始まったが、抑揚のある天皇の声は浪花節のようで、私たちにはよくわからなかった。放送が終わると大人達が騒ぎ出した。日本が戦争に負けたこと、そして男は全部殺され女は連れて行かれるのではないかということだった。私は直ぐうちへ走っていき、母にその事を報告した。その時ちょうど伯母（戦死した父の姉）がうちに来ていたが突然泣き出した。戦争に負けた悔しさか女は全部連行されるということで驚いたのかよくわからなかった。私も泣いた。とにかく男は全部殺されるのだから、それが怖かったからだ。

そのあとこの話が、うちの中でどう決着していったのかよく覚えていない。次の日私たちの分教場で朝会があったが、主任の先生が壇上で「日本は負けた…」と言い、その続きを言えないままに突然泣き出してしまった。私には先生が泣いたのを見た初めて



の経験だった。

## 虚弱体質

母の話によると、私の兄は一歳に満たないで死んだ。火傷をしてそれを治そうと近所の人におまじないをしてももらったところ、その人が水を使って胸などを冷やしたため、肺炎になって死んだらしい。その後悔から母は私たち兄弟を、両親のある子以上に大事に育ててくれた。もともと私も虚弱体質で、夜中に熱を出したりして、父が三キロほど離れたかかりつけの医者へ背負って走ることが何度かあったらしい。医者は「この子もよう育たん、兄の後を追うやろ」と半分見放していたという。

小学校へ出る頃、私の手は見え透くように白く血管が浮いていた。付けられたあだ名は「アオトンプシ」（青いなご）だった。一方弟は元気で活発、色浅黒く走っても速く、蛇をつかんで持ってきたりカエルやイモリをポケットに入れて持ってきた。近所の人が「あんな悪い子はしらん」というほどで、母は一度、終戦で帰還していた叔父（父のすぐ下の弟）に叱ってもらった。弟は畳にひざまずいて、「ごめんしとくれよ、もうせんで」と謝った。それ以後弟はおとなしくなった。

私は毎年夏になると暑さ負けして何日も伏せていたし、足の蚊に刺された後が白く化膿して、夏休みが終わっても何日も学校を休んだ。冬になると風邪を引いて何日も休むので、一年を通し

て私の欠席は何十日にもなった。

母はそんな私の健康対策のために、親戚から乳の出る山羊をもらってきた。山羊はやや歳をとっていたが、それでも一日に七、八合乳が出た。五合ほどは内で消費し残りはサイダー瓶に入れて近所に売りに行った。売り役は私である。「山羊の乳いらんな」と言うと言った家はたいがい買ってくれた。サイダー瓶一杯十円くらいである。それでも家計の足しになった。

私は一日に三合ぐらい飲んだ。効き目はたちまち現れ、私の顔色は青いどころか赤くなってきた。あだ名も「さる」とか「さつまいも」「赤まむし」等に変わった。背も伸び始めて、小学校ではクラスの中で小さい方から三番目ぐらいだったが、中学に入ると大きい方から数えた方が速くなった。同級生で一、二番になった。

## 戦没者家族

私のうちは戦没者家族である。父とその弟、母の兄と弟の四人が戦死している。昭和十九年から二十年にかけて、立て続けに四人亡くなった。戦死すると村葬といって村が葬儀をやってくれた。といつても戦死が解ったのは戦病死した母の兄だけであつて、父と二人の叔父は終戦の時点で行方不明のままであつた。兄伯父の葬儀は、普通の昔ながらの葬儀と違って、偉そうな見知らぬ人が来て、造華が供えられ、飾りの付いた太鼓をたたいたりして珍し

かったが、肉親はただ泣くだけで、私は子供ながらにいくら葬儀が立派でも嬉しくも有難くもなかった。

家族四人の戦死は以後私に一生つきまとう切るに切れない戦争体験として、今もずっと脳裏を放れない。私が、東西南北を問わず如何なる国の戦争に繋がる国策や民衆の活動でも、それが如何なる理由に補色されていても、一見正義の名目を供えていても、戦争は勿論核実験や兵器開発でも、絶対反対の気持ちを維持し続けているのは、多分戦争で肉親を失うこと不幸に裏打ちされているものと思えてくる。

戦争によって父がいないことで妻や子供が流した涙、息子や兄弟がいないことで母親や親族が流した涙は、悲しさ、恨み、無念さ、怒り、悔しさなど、人間がまっすぐ明るく気強く素直に生きようとする心を全部否定するものである。私は今、戦没者の妻である母がまだ健在であることから、町の遺族会長を指名され、仕方なくいやいやながら役目だけこなしているが、遺族会の靖国神社参拝などは行ったことがない。そんなことで戦争の罪悪が償われるはずがない。しかし岐阜の護国神社参拝や地域の戦没者慰霊祭には必ず出席している。特に岐阜護国神社は、戦没者の名前を呼称してくれるので、小学校の時から必ず毎年お参りしている。郡上の七か町村の戦没者慰霊碑も、若い頃は毎年参拝して歩いた。

戦争後、父や伯父の戦友という人が来て、父達の戦死の様子を教えてくれた。戦友はいずれも栄養失調の容態で、髪は茶色に変

色し、かなり薄くなっていた。

その報告によると、父はビルマ（ミャンマー）でイギリス軍のインパール作戦にあり、逃げる途中マラリアにかかっていたため隠れることも出来ず、トラックの上で機銃掃射され、首の真ん中を打ち抜かれて戦死したということだった。

父の弟はフィリピンのレイテ島で、その戦友と一緒に山の中へ逃げたが、それ以後のことはわからない、戦死したのだろうということだった。また母の弟は、海軍で船と一緒に沈んだらしい。父の師団は指揮官が帰還命令や撤退命令を出さなのまま、自分だけ飛行機で逃げたらしい。そのため一般兵士は撤退が遅れ多くの死者が出たのだった。インパール作戦をはじめビルマでの犠牲者は十数万人に登ると聞いた。

私はこの話を聞いてから、全ての軍人関係の犠牲者を祀るといふ靖国神社へのお参りに疑問を持った。父がもつと速く帰還の途につけば、きつと還ってきているに違いないと思うと、戦争遺族として素直に靖国神社へお参りする気持ちにならない。といっても後に私は、四十歳の頃ビルマ募参団に応募し、日本出発の時募参団一行で靖国神社に参拝した。特別に神社の奥の部屋に通され一行と共に参拝した経験はある。

## 戦後のこと

戦争間際から昭和二十年以降数年は、最も感じやすい少年期で

あり、その記憶は私のような記憶音痴にでも刺激的である。私は年齢でいえば戦中派ではなく戦後派に属すると思うのだが、生涯を通じて自分に対して戦中派のイメージがぬぐえないのは、このころの記憶が鮮明で刺激的なためだろうと思う。

岐阜県庁の確か八階に県の統計資料室があるが、私はある調べものの関係で何十回となくそこへ出入りしたことがある。明治以降の県下各市町村の統計がまとめて冊子にしてある。その中で昭和十九年と二十年は資料集が無い。かつて一度もとぎれたことがなかった統計資料がそこだけ無いということは、いかに日本中が混乱していたかという証拠である。

教科書は二人で一冊。破れそうな紙で、所々黒く塗りつぶしてあった。

とにかくこのころ日本は世界中の中でも最低に近い貧困国であつたらしい。私たちの地域では、終戦と同時にいわゆる疎開の家族がかなり多く入ってきた。都会で焼け出されて衣食住に困り、親戚などを頼って疎開してきたのである。地域の人たちの中には「昔は田舎だといって馬鹿にしておったが今は田舎に厄介になつている」などと陰口をいう人もあつた。

疎開で引越してきた子達は、学校では一様にイジメにあつた。それは言葉づかいが違っていたことや、学校に慣れないため行動がどこかちぐはぐだったためで、よく笑いの対称になつた。しかしかれらは都市部の子らしく気も強くて泣き寝入りはしなく、面

白くない時は、気持ちむき出しにして向かつてきた。

疎開の家族は勿論、在来の地元の家族も裕福ではなかつた。みんな食に飢えていた。田んぼの土手や原野に生えている草なども食の対象になり、かわるがわる摘み菜に出かけて、あたりの草原は草刈りしたほどきれいであつた。正式名は知らないが、山にあるビョウブと言う木は葉っぱをご飯に入れて炊くため、みんなの取り合いになり、山に人の気配が絶えなかつた。私も子供ながらにそれを取ってきたが、決しておいしいものではなかつた。野菜は余すところ無く食べた。が、里芋の葉っぱだけは、私はどうしても食べられなかつた。ひりひりして喉を通らなかつた。

学校へは弁当を持って行つたのだが、中には弁当を作る余裕もなく、昼食は家へ走って食べに行く子もいた。弁当は麦飯を持つてくる子は裕福な家の子で、たいていは菜っ葉の入つた草色の弁当を持ってきた。蓬を固めてその中に少し米をまぶし、それを油で揚げた弁当はわりとうまかつた。それもまちまちで、ほとんど蓬だけの弁当の子もいた。中には昼食時に、みんなから少しずつ食べ物ももらつて歩く子もいた。

疎開先が実家であつても、その家族とうまくいっていない家もあつた。そういうところは、二つの家族が別々に食事などをしていたが、実家の家族が米のご飯を食べていると、疎開家族の子供が、障子の穴からそれを羨ましそうに眺めているという家もあつた。

魚などは減多に食えなかったが、時々配給で魚が配られた。といつても集落の一組(約十五軒)にサンマが一匹ぐらいで、それを十五に切つてくじ引きで配るのである。私の母はくじがへたなのか、いつも尻尾か頭の辺が当たり、まともにおいしそうな所を食つた覚えがない。

泥棒がはやつた。私のうちは水車があり、何軒かが共同で米を搗いていたが、その水車の錠が切られて米が盗まれた。夜中に水車の音が甲高く鳴ることがあつたが、そういう時はたいい水車の石臼の米が無くなつていた。中には土蔵の米が盗まれ、近くの橋の下などに隠されていたこともあつた。ハサにかけた稲が無くなることもあつた。

戦死した人の戦友と名乗る人も時々来た。一晚泊めてあげて、翌朝気がつくとその人はもう居なく、家にあつた石鹸など家庭用品が無くなつていた。

大人も子供も飢えていたから、食べられそうなものはなんでもたべた。滋養になるといのでママシも食べたし、へびもほんの少しだが食べた記憶がある。一度だけだが、ネズミの焼いたものもらつて食べたし、寝小便に効くからといって犬の肉や鶏のときかも食べたことがある。

子供でも今では考えられない残酷なこともした。鶏の首をねじて窒息死させ、熱い湯の中に入れて羽毛をむしり料理をした。もつと残酷なことは、生きたままの鶏の首を鉈で切り下ろしたことも

あつた。また兎の足を縄で縛つてハサに吊し包丁で下から突き上げて血を出し、皮を剥いて料理した。剥いた皮も干して乾燥させ、よく揉んで敷物などにした。

子供が大人のすることを見よう見まねで覚えてきて、こんなことをしたのである。ここに書くのも憚られる残忍な行為である。

といつてこのころの子供達は、おおらかでしかも積極的、みんな夢を持つて生き生きしていた。勉強でもわからないところは夜でも先生の家に押しかけて聞いたりした。お互いに助け合い、家族が病気で農作業が遅れている同級生の家などへは、みんなで手伝いに行つた。私も母が病気をしている時、同級生が来てくれて畑仕事をしてくれたことがあつた。

今アフリカやアジアの後進国の子供達が貧困で衣食住には恵まれないながらも、夢を持ち生き生きした目をしているテレビの映像などは、戦後の私たちの姿を彷彿させる。

### 父の死と我が家

我が家はそのころ、母と私たち二人兄弟と独り者のおじいさんの四大家族で、収入といえば母が耕す農業収入だけであつた。田んぼは五反ぐらい有つたが、母一人でこなせる分の三反だけ作り、二反はよそへ貸してあつた。三反農業といつても今と違って何やらにまで手作業で、三十代前半の女の手仕事としては大変だったに違いない。おじいさんは障害者で仕事は本人の裁量に任せて

あつたし、私たち兄弟は二人とも体は余り強くなく、特に最初の子が病死しているので、母は自責の念で、私たちにはあまり仕事を当てつけなかった。だから私は同級生等に比べると仕事はしないほうだった。

あの頃は子供でも、仕事するためみんなの手の平に黒い筋が入っていた。特に冬はみんなあかぎれが出来ていて汚い手をしていたが、私たち兄弟は母のおかげで白いきれいな手をしていた。それでも今の子に比べればよく働いた。学校から帰ると、玄関の上がり口にどんぶりに麦飯が盛ってあつて、その横に「どここの田んぼに行っているから、食べたらいいで」と書いてあつた。

とにかく全てにつけ私は戦争を恨んだ。母も同じだった。おじいさんは私が五年生の時亡くなった。葬式の時、私たちは納戸で着替えをしていたが、弟が「こんなおぞい服着とうない」と泣いて抵抗をした。困り果てた母は、「父ちゃんさへ生きていたらええ服させてやれるのに」と泣き出した。私は弟のわがままを恨むと同時に何かあるたびに泣き出す母を哀れんで見ていた。見かねた伯母（父の姉）が「おばちゃんがええやつ買ってやるで今日はこれを着なれ」と弟を慰め、弟も泣きやんだ。その後伯母は弟に新品の服を買ってくれたようだった。

母は組の寄り合いに出かけることがあつた。何年生の頃だっただろうか、母が出かけて弟と二人だけで留守番をしていた。夜になると我が家は水車のきしむ音がキーキーと聞こえて薄気味悪

かったが、私と弟が同時に泣き出したことがあつた。全く同時である。私はその寂しさが父のいないことに由来することを自覚していたが、もしかして弟も同じかも知れないと思つて「どうして泣くんよ、父ちゃんがおらんでか」と弟に聞いた。弟は予想通り「うん」と頷いた。

私は中学卒業後はどこかに就職するつもりであつたが、母は伯母の主人と相談して、「おまえ高校に行け」と言ってくれた。私は一瞬どきつとした。弟がそれを見ていて「お兄ちゃん赤くなつた」と言つた。母は奨学金は勿論母子福祉の関係を頼っているいろの所から金を借り、私を高校に出してくれた。

父の遺言は「兄は先生にせよ、弟は軍人にせよ」ということだったので、私は高校を卒業し父がそうであつたように代用教員にもなるつもりだったが、高校の先生に聞くとその制度は今年から無くなったということだった。仕方なく私は一年宅浪して教員になれる大学を受けることにした。翌年どうにか岐阜の大学に入ることが出来た。

母はそれこそ金の借りられるところからしゃにむに借りているようだった。それと最も力を貸してくれたのは、看護婦をしている母の妹だった。この叔母には私の生涯を通して、子供までもが今日に至るまで世話になっている。母はいわゆる遺族年金が下がるようになって以前よりは金の工面がつくようになっていたがそれでも私が大学を卒業する頃は、板葺きの屋根は雨漏りが何十箇

所と有り、畳は破れてその上をボール紙で覆い画鋏で抑えてあった。私が四十歳過ぎたころ母は「やっとおまえ達の大学の借金が済んだわい」と言った。借金だけは母が遺族年金の中からやりくりして払ってしてくれたのであった。弟も名古屋の大学に入っていたので、今思えば人生の殆どを我が子にかけてきた母の苦勞は、言語に絶するものがあつた。

### 母を詠む

家刀自の母は哀しき寡婦なれば三十路のなりはひ語らふ夫亡し  
灼け処地のビルマは遠しパコダ背に剃髪慣れぬ夫の写真見る  
いかばかり八月の十五日の恨めしき釈迦祭る日に夫は逝きたり  
戦争といふ名を憎まず泣き伏しぬ六年も添はず夫は逝きしに  
野分けして雨漏り繕ふ術もなし宿世哀しき母と子とあり

この国の古き掟か家を守り子を育てよと人の教へり

### ビルマ墓参

私はかねてから一度父や叔父の戦跡を訪ねたいと思っていたが、ビルマ墓参を募集していることがわかり応募した。四十歳の頃だった。私にとっては初めての海外旅行で、九日間の旅であった。初めての海外旅行初めて見る外国なので心も浮かれそう、不謹慎になることを抑えながら、ビルマ国内を巡拝した。私の父はビルマ国ペグー県ニアンカシ駅の近くに遺体を埋葬したということ

だったので、そこへ行きたかったが、そこは民族争いをしていて危険だという理由で行けなかった。仕方なく遙か向こうのペグーの方向に向かつて、石を積み上げて墓を作り、孫（私の子供）の写真と家から持って行った谷川の水、梅干しを供えてお参りした。涙が止めどもなく流れて、喪服を着ていたので汗か涙かわからないくらいに濡れてしまった。

ビルマの太陽は熱いというより痛い感じで、こんな所では雪国に育った父などは、例え戦線に出なくても死んでしまうだろうと思われた。私もあまりにも熱いのでガイドから進められて、警戒はしていたもののアイスクャンデーをちよつとだけなめた。その晩ものすごい下痢に見舞われ、はらわたまで出てしまいそうだった。そのためラングーン（ヤンゴン）で一番有名なシュエダゴンパゴダを見ずに終わった。

ホテルでボーイさんと話している時、自分の父がペグー県で死んだと言ったところ、そのボーイさんがペグー県から来ているボーイがいるというので、会わせてもらった。その人にペグー県にニアンカシ駅と言うところがあるかと聞いたところ、有ると言う話だった。そして「貴方の父はそこにレイダウンしているのか」と聞いた。ビルマは英語を第二外国語としており、私の中学一年生程度の英語でも通じた。

もう一つホテルで、アウンサウン・スーチーさんの話を聞くことが出来た。彼女は参拝団の集まっているところへ来て、自分は

アメリカの大学に留学していたこと、今は図書館に勤めていること等と自己紹介し、ビルマについては、ビルマの平均寿命や男女の結婚の習慣などについて話してくれた。

ビルマ最大の川イラワジ川はどんよりと濁り、流れているというよりよどんでいた。母の妹の叔母も、従軍看護婦としてビルマ戦線におり、逃げる時はイラワジ川を何度も横切り、隣国のタイまで逃げてきたと言っている。その話もまた想像を絶している。

## 最後に

戦争の悲惨さ過酷さは、話に聞いたり本を読んだりしてもとどまるどころを知らない。小学生の時、学芸会で侍の役をやることになり、刀を身につけるため近くの人から軍刀を借りた。それは当時の通達で刃が二つに折る処置が施してあり、刀とは言えないものになっていたが、鏢つばの裏側にねばねばした血糊がついていた。後から聞いた話だが、日中戦争の時中国人の家に切り込むと、奥の部屋に女性何人が隠されていた。女性は纏足で逃げられないから隠してあったのだそうだ。日本軍はその女達をいためつけ、そのあとで斬り殺したという。その刀の血糊とそういった蛮行が一致するものかは知らない（そうでなかったことを信じている）が、むごい話である。

私は『大和町史』（通史編下巻）編集では「満蒙開拓」や「北海道移民」等を受け持った。私の調べたところでは、以下間違い

があるかも知れないが、岐阜県の満州開拓移民は全国で七番目に多く、一万二千三百八人である。その中で郡上郡は県内で最も多く三千百九十六人である。この中で約三分の一が犠牲になっているが、開拓団によつては半数が死亡しているところもある。帰還した数人から話を聞いたり全国の満州開拓団員の手記なども読んだが、これも戦争と同じく悲惨そのものである。

私が一番忌み嫌うのは、戦争のたびに多くの女性が犠牲になることである。これは岐阜県の記録ではないが、満州開拓団帰還者の手記によれば、ロシア軍の南下によつて多くの日本女性が、ある団では数人が、またあるところでは女性全員が、まるで餌食のように犠牲になった。

戦争は罪悪である。人間のあらゆる行為の中で最も罪深い蛮行である。

私はイデオロギーによる反戦論者ほど聡明ではなく、論理も持ち合わせていないが、如何なる論理に裏付けられようと、戦争は悪である。戦争が起こつて反戦ののろしを上げるのではなく、常に非戦を貫くことが最も大切ではなからうか。

以上私の自分史のようになって恐縮だが、私の生そのものは今でも戦争に繋がっている。母は、病弱で医者も「この子は育たない」と宣告した私を、無事に育てあげてくれた。そして母の願いに近い人格を植え付けてくれた。

古稀を迎え自分を振り返る時、自分の無知や愚かさ加減に羞恥心を抱くことが数え切れないほど多くある。それでも母に育てられた私は、馬鹿なりに女性も女性の特性を持っているか、優しさや思いやり親切心などは人並みかそれ以上に有しているか、思っている。同時に気が弱く優柔不断で、妻子をうまく導けなかった後悔もある。

もし父が生きていたらなら、男性らしい勇気や決断力、統率力など、生き抜く力強さも備えることが出来たかも知れないと思うと、悔やみがつきまとう。無能無才の自分自身への呵責を転嫁させる、筋違いの心象だとは思うが。

二〇〇八年二月 記す

この原稿は、岐阜大学国文学科のある年度の卒業生が編纂を企画している『私の戦争体験』（仮称）の原稿募集に応じて書いたものです。



## 転覆の歴史発見

いなさくぶんか  
福文化が魂を日本を他って来た

高橋 義一

### 前書き

①昭和四五年、大和村史編集委員会担当員は白雲山観音堂講中(一九七〇)  
(代表者青木桂三全員、故人)(三谷)により、白雲山(最高四七〇m)古寺の歴史を解明  
するため、一日案内をうけた。焼け残った何百年か前の本堂の  
遺構礎石、二〇数基の五輪塔古墓群、無数の自然石の墓標、焼  
失したと伝える七堂伽藍跡、本堂焼け跡に発見された数体の懸  
仏等の説明を受け、観音堂古寺の歴史を何としても解明して欲  
しいと、切実に要望された。

②同年、金釵神社（金釵神社）社宣故河合友三さんが社殿に発見した由緒書き  
板に楷書体の漢文で、次のように書かれている。

「白山四社・三寺は、岩本・金釵・下白山・三の宮、奈谷寺・宇  
谷寺・栄谷寺なり。当社金釵明神は本地俱利迦羅不動明王、

また金釵大権現と称し奉る。嵯峨天皇弘仁一四年始めて加賀国  
仏ヶ原（石田早小）に祝（神に仕）奉るなり。その後、当所に勧請し  
奉るものか。（中略）本社を再興し、社殿を修覆するものなり。

延宝八年再興の時、この村の住士桜井良治（一六八〇）旧記をもつ  
てこれを考う。後人なお神書（の眞実）をもつて、これを考うれ  
ば幸いなりと。

白雲山古寺や金釵神社の遺言に應えるため、以来真剣に取り組  
んだ。

しかしついに、昭和五九年刊『大和村史通史編上巻』に、間に  
合わす事が出来なかつた。無念の思いにかられ、以降も解明に努  
めた。

三〇〇〇年前、朝鮮半島の動乱により、白山比咩神・韓国伊太  
氏神・劔神を奉じ、中国の稲作・農作物を持して倭に入植し、  
すぐに「弥生稲作」を始めた。そうして、一世紀ころから倭を統  
一しようとするヤマト政権が、各地の開拓地に武將を派遣して服  
属させてゆく。その事を謎のように記している。『延喜式神名帳』  
や「闇の歴史」を解いて、故郷や日本の歴史を明らかにして行き  
たい。

## 第一章 人類、三〇〇万年かけて進化増殖

### 第一節 東洋の曙

三〇〇〇万年前から一五〇万年前にかけて、人類の始まりである  
直立歩行のアフリカ猿人が簡単な石器も使って、世界の各地へ拡  
がったとされる。

一九四九年成立した中華人民共和国は以来、官・兵・農が協力して、文物・考古遺物の発掘を強力に進めた結果、雲南省元謀・陝西省藍田・山西省芮城・湖北省郟県・同郡西等で、猿人から進化した原人や遺物を多数発見した。

それ以前、大正一三年から昭和八年にかけて、北京郊外周口店の石灰洞窟で、原人の化石が多数発見された。火を使った炉跡・捕殺獣皮剥用の石英打製石器・哺乳動物の化石等も発見された。北京原人と名付けられ三〇〇四〇万年前のものと推定されていた。ジャワ原人も同時代と比定されている。

⑧『大和村史通史編上巻』は左のように記述。

日本では、兵庫県明石原人(発見地)、栃木県葛生人、豊橋市牛川人、浜松市三ヶ日人・同浜北人。多治見市西坂人(一〇万年前・及び一五万年前)。長野県野尻湖元湖底から、ナウマン象や大角鹿の化石と共に、加工痕のある骨角化石や石器が発掘されていたので、昭和五六年第八次発掘で、約四万年前の地層からナウマン象の肋骨製槍先が発見された。ナウマン象は約三〇万年前〜三万年前、日本や東アジアに生息し、マンモスよりやや温かい地帯に生息したとされる。従って、明石原人から野尻湖出土遺物の時代にかけて、日本列島がアジア大陸と陸続きだったので、朝鮮半島を経由して、九州↓中国地方↓東北地方まで、大角鹿・ナウマン象と共に、北京原人の末裔が移住したと推定される。

つまり、猿人から原人へと進化増殖を続け、ついに、四一〇〇年前ころ中国の華北に、夏王国を建てた。しかし、三六〇〇年前ころ殷王国に滅ぼされた。だが、三一〇〇年前ころ殷は周に滅ぼされた。このように三国が華北で攻めぎ合って、中国内を席卷した。

その殷廢絶の遺跡殷墟の都の発掘で、王墓・人骨の外に青銅製の兵器剣・矛・豪華な祭祀用具、装飾用象牙細工・玉製細工物・土器等が多数発見された。青銅器(銅に亜鉛を二八%と鉛を溶かして硬化した合金)は四〇〇〇年前ころから造られ、殷王国に至って、右のように勝れた美術品を生んだ。

## 第二節 文字の発達が人智を促す

殷墟に異様な象形的記号が多数発見されていたが難解であった。一九世紀以来甲骨文字(亀の甲骨に刻した占いの用文字)として、多くの研究者(日本では善台海忠白川鼎外)により、二〇世紀までに四五〇〇字ほど解読され、殷王国の高度な文化・生活様式が詳らかにされた。しかし、それは王族貴族の専制政治のために使用された物であって、下層の庶民農民は戦争・使役・貢租(の田税)を強制され、反すれば「天に叛いた者」として即刻、一家中が首をはねられて埋められた。そして貧困みじめな土窖(の穴居)に住んだ。中国の帝王とは即ち天であった。

春秋戦国時代(西暦前七七〇)になって、晋国が建ち、前期の周を助

けて大国に成長したが、破れてのち東晋を再興した。

東晋の書聖王羲之（三〇七）は、竹簡・木簡（竹・木に記された甲骨文字や篆書（甲骨文字を主体に、横金太で記した文字））等から、草書（篆書を略した書）（流線的な）を創出した。子の王献之と共に、巧妙に絶妙に組み立てた。父子の二王が中国で神聖視されて来た所以である。

しかし、二王開発の漢字がどれ程のものであったか詳かでない。拙宅に、一〇数年前長安大雁塔下の店で、四〇〇円で求めた王羲之の真筆「福」（後代二人の大家の証明のサイン入り）の大字（横三三四）を表装して床に掲げている。すばらしい草書である。（ただし、今日では禁止され



ている墨汁使用の湿拭式扱本）。

なお、二五〇〇年前の孔子は、甲骨文字主体の篆書を使って弟子に講義した。西暦前二二二年、中国統一の秦の始皇帝は従来の篆書を「小篆」という字体に統一した。その漢字・漢文を官職に就くための試験に用いた。孔子歿後、時を経て四書五経等は楷

書の漢字によって書き継がれるようになった。

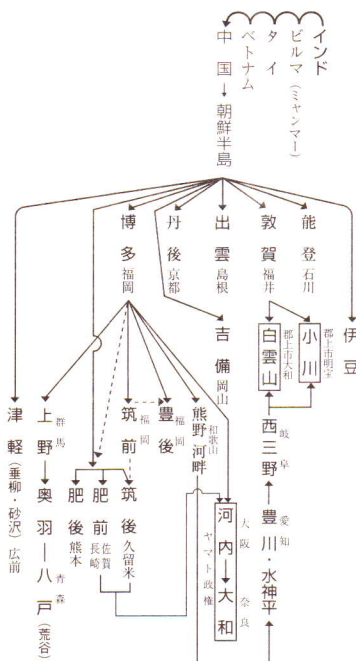
その後、漢字は韓国に伝わり、倭国へは仏教と共に欽明天皇西暦五五二年に伝来した。漢字が「やまとことば」に訳された時から、日本個々の国字が生まれた。

韓国にも同様に国字が生まれた。日本の『延喜式神名帳』には、白山比咩神社・韓国伊太氏神社として記載された。その咩・底の字は、日本の辞書にも中国の辞書にも無い。すなわち、両社の神は韓国から伝わったのである。

（以上、講談社現代新書『甲骨文字の読み方』、同『中国文明の歴史』、平凡社『字通』、吉川弘文館『延喜式』、同『国史大辞典』、『広辞苑』、中日新聞社『中華人民共和国出土文物展』、ハンリム社『韓国の歴史』）

## 第二章 稲作伝来の経路、『延喜式神名帳』の謎

### 第一節 伝来伝播の主な経路



②(一)↓は経路、↑は不確かな経路。太字で示す地域の場合は本文で説明。考証資料は、ハンリム社『韓国の歴史』、ソウル・ドライブ社『慶州』、吉川弘文館『延喜式』、平凡社『字通』、白井千吉著『美濃国と国分寺の成立』。資料提供は、石川県敦賀市教育委員会、岡山県総社市教育委員会、愛知県新城市教育委員会、長崎県教育庁文化課、千葉県佐倉市国立歴史民俗博物館、青森県八戸市教育委員会、和歌山県熊野市熊野速玉大社、岐阜県郡上市明宝浄福寺、同大和町歴史資料展示収蔵館、福岡県久留米市教育委員会。

(二)ハンリム社『韓国の歴史』は、一九六四年以来、旧石器時代の遺跡が多数発見され、三万年前から人々が半島に住んでいた事が判明したと述べる。そして、七〇〇〇年前に新石器時代が始まり、その遺跡・遺物により、韓国人の祖先である事が確認された。それは蒙古系のツングース種族(並代の満洲国に相当する地域に住む)に属する。さらに、三〇〇〇年前には、中国華北から青銅器文化が渡来し、また稲作をはじめ、アワ・キビ等が栽培され、牛馬などの家畜の飼育により、本格的な農耕生活が経営されるようになった。

青銅器文化が発達し、生産力・経済力が向上すると、各部族を統率する権力者が生まれて、平壤城(ピョクヤン)を築き、さらに領土を拡げて古朝鮮が建国された(『三国遺史』の「檀君神話」)。等々、述べてい

る。

## 第二節 越前国へ白山比咩を奉じて古朝鮮より庶民農民入植

稲作は、雨水を司る龍神と共にインドから拡がり、ビルマ→タイ→ベトナムを経て中国華南に渡り、呉・越国に栽培された。しばらくして、前述の夏・殷・周の戦乱に巻きこまれた。越国の下層の庶民農民は船を持って盛んに漁撈して魚も大切な食糧にしていたので、過酷な兵役・使役・徴税を逃避しながら北上し、中国東北部朝鮮半島へ渡った(『講談社現代新書』)。

けれどそこも、前述の通り「古朝鮮」建国のため、殷の干渉による戦乱に巻き込まれたので南下し、更に海を渡って穏和な倭を目指した。津島暖流の通る温かい越前の敦賀・能登・出雲・博多等の湾港に上陸し、すぐに稲作・農作物の栽培を始めた。——三〇〇〇年前である。

③(一)一九七七～八〇年北九州の全稲作遺跡の「放射性同位炭素」の年代測定の結果、いわゆる「弥生稲作」は、三〇〇〇年前まで遡る事が確定された(千葉県佐倉市国立歴史民俗博物館提供資料)。

(二)石川県と岐阜県にまたがる白山は、大汝峰二六八四m・御前峰二七〇二m・別山二三九九mを、白山三山と称する。富士山・御嶽山と共に太古から雪を頂き、火山の火煙を噴き上げ、日本の三大霊山とされて崇敬されて来た。そして、白山は平安初期に、富士・御嶽は江戸期に開山された。白山は、

渡航する船の目標にもなっていた。

(三)天正一三年九月二十九日<sup>旧</sup>夜半、白山が大爆発した。飛騨国帰

雲城主内ヶ嶋兵庫介は、義弟郡上一六代東常慶嫡男常克及び侍屋敷・村落と共に一瞬に崩落埋没(生現は今日も)。

近江国長浜城主山内一豊・千代の一粒種六歳与祢姫は崩壊の城の下敷きとなって惨死。城下の村落、住居民は琵琶湖の大津波に吞まれて潰滅。豊臣秀吉・茶々・幼な秀頼の居城京都伏見城・武家屋敷崩壊。北陸・越中・美濃も長瀧寺等大



被害。

——岐阜地方気象台は、活断層による連動性大地震としてM7.9と推定。関東大震災並みだが、被害はより広範囲であった(拙著「乱世の金字塔」)。

〔写真〕筆者撮影

岐阜県郡上市高鷲町

蛭ヶ野高原より望む

白山三山

「古朝鮮」の北鮮系移民団は、敦賀に上陸して稲作・農作物を始めたが、白山の想像を絶する積雪・降雨により毎春夏の洪水被害は甚大であった。とりわけ、白山麓を北へ流れる手取川は石川(郡)と呼ばれる荒れ様のため、河畔に白山比咩神を祭祀して、白山の水分神を鎮撫した。

①北鮮は、年中白雪を冠する太白山(白鬚頭の意)が連なつて、積雪降雨による洪水は黄緑江に溢れ、年々耕地・家屋・住民農民を流出した(近年、黄緑江を多数の溺死体が流木と)。恐怖の地域民は白山比咩神を手厚く祭祀して来た。

入植した倭の白山にも恐怖の神が坐ましたので、古里の白山比咩神を請来祭祀したというわけである。

②そうして二一〇〇後の『延喜式神名帳』には「白山比咩」と和訳したが、入植当時は殷王国の「甲骨文字」しかないので、あえて表記すれば「AΩA咩」となる(白山神考)。

③先述の野尻湖底発掘調査で、四万年前の地層からナウマン象の化石と、肋骨製の槍先を発見。さらに、高山市丹生川町根方岩陰遺跡出土の人頭骨は三万年前と確定した(昭和五九年丹生川町根方岩陰遺跡調査結果報告書)。そして、大和町「白雲山遺跡」調査試掘穴から、二万一千余

年前の炭出土(一九九五年学術院大学放射年代測定結果報告書)。

〔四〕「韓民族の先祖」は、三万年前の蒙古系ツングース種族である事が考古学上確認された（『歴史』）。さらに、昭和四八年毎日新聞社刊江上波夫 大野晋共編『古代日本語の謎』では、

「アルタイ語系のトルコ族・蒙古族・満洲ツングース族・韓国人・日本人の言葉の並び方、文の構成法、名詞の客語

（天部は花子に花束を贈る。この花束が客語の目的語。）、「動詞の活用語尾等は一致する。それは、インド・ヨーロッパ祖語（英語等を含む）や、夏・殷・周の漢民族の祖語とは異なる。ただし、ツングース族・韓民族は順心の同化力が強いので、漢民族と混和して、いつの間にか同化してしまう」。

## 第二章 倭所々開拓の経緯

### 第一節 氣比神宮と劔神社・白山比咩神社

『延喜式神名帳』越前敦賀郡に、白山比咩の神社の外に、劔神社・天利劔神社、天八百萬比咩神社・天国津比咩神社（全史）を記載する。

②劔神二社に関して、敦賀市教育委員会へお尋ねしたところ、

昭和六一年福井県神社庁敦賀支部発行『敦賀郡神社誌復刻版』

中、必要な部分のコピーを頂いたので、要約して次に述べる。

（一）東浦村 村社劔神社 祭神劔大神。由緒（略記）岡崎半島の麓の洞窟は常に潮満ちて龍神住むと伝う。往古、一人の武者

が洞窟に近づいた時、佩刀の刀身だけが海に落ち、満水の洞窟へ吸いこまれた。海に飛びこんで洞内の刀を拾い、社殿を建ててその刀を奉納。数日後、海中から大牛のような怪物が現れ、奉納刀を咬えて海中に没した。今に一月四日を「宮の行い」として、怪牛退治を行う。氏子八九戸。

（二）粟野村 村社劔神社 祭神比咩大神。誉田別天神併祀。由緒（略記）『統日本紀』に「宝亀二年從四位下勲六等劔神食封二〇戸、田二町」。『延喜式神名帳』の敦賀郡劔神社とは当社。往古より氣比神宮西方（敦賀湾の方面）鎮護の神として尊崇。明治四四年、神饌幣帛料供進神社。氏子一一〇戸。

（三）松原村 無格社 劔神社 祭神天利劔大神。由緒。古記録（略記）当社は『延喜式神名帳』の神。西方に嶽を負い、西南方の棚田を隔てて敦賀湾を眺望。康永二年文書に「利劔宮」（利劔宮とは弘教伝来六世紀以後の言葉で、一切の邪悪を払智によつて破りくたかという。）戸数往古より一二戸に制限し分家は氏子にせず。

——右の三社共、劔を奉安して、敦賀湾の悪魔を退治し、出入する船の安全を図った神だった事が知られる。

三千年前に朝鮮半島から移住し、「越前王国」（仮称）を築いたが、ヤマト政権に征服された。政権は氣比神社を建てて、引き続き越前国を祭祀し、天平二年に從三位を授け、三四四戸の神封領

地を持った。

平安末期、鳥羽院を本家とする皇室料に入り、室町期の後醍醐天皇まで総覧される。従って「寄進荘園」が競い増えて越中・越後まで及び、作田は二六〇町歩近く、所当米(割り当)一七〇〇石、請作米(領主気比大社の田地の小作料米)を合わせると二二〇〇余石。うち本家の皇室分七〇〇石余、領家預所職分二九〇余石、大宮司預所分一七〇石近く(建暦二年(一一二二)「気比社領惣目録」。「歴史大事業」ただし右数値は辞典のまま)。

同じく同辞典掲載の神宮絵図は、「気比神宮・寺院城郭」という城を構築している。柱間一丈 $\parallel$ 三m計算で、六〇m四方を高屏で囲む。三重の北塔並びに南塔、本殿入口南に五重塔、僧堂・炊堂・音楽堂・拜殿・鐘楼、神殿も合わせて一二社ほど数えられる。

寛平五年には、正一位勲一等となり、越前国一の宮とされ、北陸道総鎮守の称があった。

しかし、天正元年織田信長が越前朝倉義景討伐の時、気比神宮を焼き払い、全社領を没収した。

⑤信長に推されて室町幕府第一五代將軍になった足利義昭は、信長の強制的指図に叛いて、上杉・武田・比叡山・一向宗等を糾合して反信長体制を作った。しかも、天台の快僧淨藏(あしかがよしあき)が貴所(九四九)の直弟子、越知山大谷寺神興上人が師の口述から創出した白山禅定道(白山登頂)の開祖「泰澄大和尚像」を同寺に祀ったので、天台験者集団(山伏)が多数越知山に屯し、

気比神宮の天台験者集団と共に、信長の越前進攻に対抗した。ために、大谷寺・気比神宮は焼き払われ、越前の天台勢は壊滅した。江戸幕府下においても、気比神宮は、わずか百石を宛てられたに過ぎない。

## 第二節 出雲王国(仮称) ヤマト政権へ国譲

①『延喜式神名帳』出雲国意宇郡(松江市塩田町)熊野坐神社大坐・速玉神社小坐、同坐韓国伊太氏神社小坐、同坐坐韓国伊太氏神社小坐、同坐坐韓国伊太氏神社小坐、同坐坐大穴持神社小坐、同坐坐大穴持御子神社小坐。

②同出雲郡(出雲市大社町)杵築大社大坐(=出雲大社)、大穴持神社小坐、同坐神大穴持御子神社小坐、同坐神伊佐那伎神社小坐、同坐神須佐袁神社小坐、同坐韓国伊太氏神社小坐、同坐韓国伊太氏神社小坐、同坐韓国伊太氏「奉」神社小坐、神産魂命かむすびめのみこと子午日命こひるひのみこと。

③(一)右は主な神社の抜出。韓国伊太氏神社は都合六社。大穴持神は『記・紀』に言う大国主命で、須佐之男命の末子。意宇郡の熊野坐神社大坐が今の熊野本宮大社(祭神・熊野)、速玉神社小坐が今の新宮熊野速玉大社(祭神・熊野)である。共に元官幣大社として歴代天皇が尊崇した。

この記述の仕方は、二世紀ころヤマト政権が拡張期に入るや、熊野三社(本宮・神宮・智神)はいち早く同政権に降り、そして、「大・国主の出雲国譲」により、ヤマト政権は、熊野本宮の大将に

新宮の大将を付けて出雲国へ派遣し、嚴重に監理させたと理解される。——後述するが、この件を裏付けるような事が出雲大社近くの村の農道建設工事中に起きた。驚嘆するような考古遺物が発見された。

(二)出雲郡の神産魂命は『古事記』に言う少彦名命で、早くに出雲へ渡って、粟・きび等を栽培し、医薬・禁厭などの法も創めたとされる。

前述をくり返すが、中国東北部「滿洲」辺の蒙古族系ツングース種族は、三千年前には増殖し始めた。三千年前には発達した青銅器を持った殷王国の支配下で、平壤城を築いて統一「古朝鮮」(＝北鮮)を建てた。が、殷王国の虐政が絶えないので、下層庶民農民は避難南下し、さらに平穩な倭の所々へ大挙移住した。

他は、後に「新羅」・「百濟」国を建てる地帯だが、「北鮮」と三つ巴えの攻めぎ合いに大いに乱れたので、有力な移民団が、倭へ避難したわけで、『延喜式神名帳』は、そうした歴史を秘めてきた。

そうして財力を蓄積し、杵築神社(杵築は杵臼と同儀)という広大な結構の社を建立した。本殿の高さは天禄元年ころ16丈Ⅱ48mが最高であった。太い栗材を三本胴巻きし、中途で継ぐ工法だったので折れて倒壊を度々したため太い杉材に変えて、遷宮を

繰り返し、宝治期からは丈は低くし床面積方8.5m、寛文期には床方11m・高24mくらいにされた。秀吉の太閤検地は全国の社寺領を容赦なく削って武士の知行に当てたが、同社は二千七百余石という破格の社領が残され、親藩松平松江藩の手厚い被護を受けた。全国屈指の大社であって、伊勢神宮と並んで絶大な崇敬をうけて来た。

昭和五九年、松江市西方30kmの斐川町の農道建設中、荒神谷遺跡(須恵器出土の遺跡)から、整然と四列に並べられた三五八本の青銅劍(国宝)が発見された。それまでに全国に出土した銅劍は総計三〇〇



本ばかりである。さらに翌年、銅劍発見近くに銅矛一六本・30cm大の小銅鐸六個(実数は八個)(国宝)が発見された。

そして平成八年、荒神谷遺跡の東南3.0kmの雲南市加茂町の農道建設中、銅鐸三九個(四五cm大の個、三〇cm内四組兄弟鐸)〈国宝〉が発見された。

銅劍・銅鐸は、今まで各国に散発的に出土していた(銅鐸は二)。



ところが出雲の場合は、天平五年の『出雲風土記』に、神代伝説を伝えていた。「大原郡神原郷に〔天の下造らしし大神の御財を積み置き給ひし処なり〕と記し、大原郡神原郷は、天の下（出雲国）をお造りになった大國主命の財宝を積んで置いた所だと明記した。この神話は「記紀」には無い。

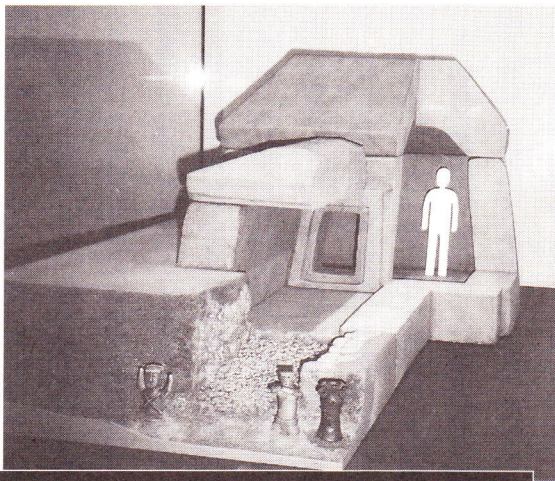
出雲開拓団は莫大な財宝を蓄積したが、ヤマト政権に降る時は土中に秘めて渡さなかった。開拓地だけ渡した。そして、出雲大社という眼を奪うような一大社殿には、国譲りの大國主命を祀りこみ、米俵に乗った百姓の神大國さまよ、と後々まで敬愛されるようになった。抱き合う恵比寿さまは商売繁盛の神様で、愛嬌たっぷり。（『延喜式神名帳』、吉川弘文館『国史大辞典』、PH P 文庫



『出雲抹殺の謎』、ハンリム社『韓国の歴史』、出雲大社資料）

〔写真〕大黒が竹みにすくった小判を、恵比寿が大袋に受け入れている。  
（筆者愛蔵）

なお、『延喜式神名帳』に「出雲国造に賜う負幸物」を記す。出雲国造が新任の儀式に賜わる勅贈品に対して、国造は、二年間潔斎奉持して訪朝し、返礼の儀を行う。その勅贈・返礼儀式は重厚であり、天皇の贈り物は、まばゆいばかりの数々の宝物。従五位下以上の出雲国造は、国政には関与せず、出雲の神々だけを祭祀する官として、世襲された。なお近年韓国系の巨大方墳が二基発見された（○島根県立古代出雲歴史博物館に○）。出雲王国の墳墓である。



（筆者撮影）



### 第三節 筑前の奴国、ヤマト政権に降る

『延喜式神名帳』筑前国(福岡県)十九座(小三座)の中、大坐一六座を、次に抄出。

① 宗像郡 宗像神社三座(現宗像市・祭神沖津彦・田心姫(たごりひめ)神・中津宮浦津姫(なつみやうづひめ)神・忍津宮市杵姫(しのつみやうぢひめ)神)

② 那珂郡 住吉神社三座(現福岡市博多区・祭神底筒男(そこつお)命)。八幡大菩薩(現福岡市東区香椎宮(かしのみや)で、仲哀(なかつら)神)

③ 糟屋郡 志加海神社三座(現福岡市東区・祭神志加(しか)命)。竈門神社(現福岡市博多区・祭神天智(あまのちか)命)

④ 太宰府 御笠郡 筑紫神社(現太宰市・祭神奥津日子(おくつひこ)命)。竈門神社(現太宰市・祭神奥津日子(おくつひこ)命)

天明四年、筑前宮北西12km志賀島で、一百姓が発見した金印は、

印面一辺約二・三五cmに「漢委奴国王」と刻し、鈕(つま)はすばらしい鱗竜(うろこりゅう)が巻き着いた物。総高約二・二三cm、質量一〇八・七二

9g、比重一七・九四、ほぼ二二金で鑄造の可能性という

(朝日新聞社発行「福馬台の科学」)。

この印章は、後漢初代光武帝中元二年、倭の奴国が朝貢した時

授けられた物である。奴国は「魏志倭人伝」に述べる带方郡(帯方郡)

より邪馬台(邪馬)に至る道中であって、北九州の大国(余戸)であ

った(『三宅本吉野史考(古史考)』)。

同ゼミナルで古田さんが示した「福岡県教育委員会・調査概報・一九六三年」の中の貴重な資料である「福岡県須玖・岡本遺跡を中心とした弥生期から古墳期までの遺跡分布図」。

極く要点だけ述べると、——日拝塚・下白水大塚・竹ヶ本大塚の前方後円墳三基は、奴国を征服したヤマト政権派遣將軍の墳墓であり、熊野神社前と春日中学校東北の円墳二基は朝鮮系の墳墓である。奴国王級のものともみられる。

⑤ 一九七五年頃、韓国慶州(元新羅)を訪れて方々を見学した。

五、六世紀の円墳天馬塚の石室は、奈良の石舞台古墳の数倍

中に墓を造り、死後、遺体・遺物を埋葬する。今でも金持ち

はそうする。墓所は広大で多くの円墳が群集するが、各自大

切にし盗掘も無いので、立派な遺物が残された」と。側面は

ガラスケースを巡らして、遺物を展示。その中に、私の町

「白雲山遺跡出土」の「暗緑色蛇紋岩製弥生式柱状抉入片

刃磨製石斧(のみの段目)に酷似した石斧を見つけた(影内禁止)。

(二〇〇七年、奈良の蘇我馬子(蘇我)の石舞台古墳等を見学。八〇

m余の方墳で、石室は何百トかの巨石で積み、天井は何千ト

かの石二枚で蓋い、石室の高さ約4.5m、幅約3.5m、羨道(羨道)

は約13m。石舞台と称する平たい石は厚さ2mで5m四方。

近くに何百人かの賤民が叱咤(しつた)されて積む想像図を掲示する。

新羅系蘇我氏の専横(馬子は意に反した)は結局、滅亡に追いやられ



助成を受けて建設し、個人の蒐集物や多数所有者の貴重品を受けて展示した。主な陳列品

弥生時代―かめ・こしき、大形の壺・器台・かめ棺・モモの種子の入った壺・小形土器、石包丁・石斧・石鏃（出土地は略す。以下同様）。

古墳時代―円筒埴輪・物の形の埴輪・勾玉・劔・刀（以上古い大形古墳）。刀・鏃・馬具・須恵器・金環（以上新しい各地の小形古墳）。その他、製塩用具（各地の師楽式土器）。けれど、個人の手渡ったままになっているのか、銅鏡・銅鐸類を見ない。

なお、国分寺跡・同尼寺跡等の古瓦、江戸時代の古文書・古地図。たたらふいご（備前長輪石炭採掘用の物もある）。



ヤマト政権は他の征服地よりひと足早く吉備王国を攻略した。やはり同国の抵抗は激烈であった。ために、政権はより多くの屯倉を設け、政権直轄の水田経営や採鉄・鋳産の労役の徴収を厳しくした。備前・備中・備後各国造や、服属の土豪和気氏（道鏡の政権奪取の先祖）等を郡司に任じて、きめ細かく統治した。

江戸期に至っても、分割統治をされた。

#### 第四節 伊豆王国（仮称）三嶋大社の叡智

(一) 『延喜式神名帳』は、三〇〇〇年前前韓国庶民農民が、大量に入植した事を示唆している。すなわち、比咩神九社、氏神三社、計一社を記載する。古朝鮮Ⅱ北鮮系（上陸民と同系）と新羅系（出雲上陸民と同系）の両移民である。しかし、『韓国の歴史』は越前・北九州・出雲への逃避経路は図示するが、伊豆（静岡）への経路図は無い。

(二) なぜか。太古の舟は日本の銅鐸の図柄にも刻しているように、一本の太い丸太をえぐって造ったカヌー様のものである。韓国慶州博物館展示「雁鴨池出土の木船」は九〜八世紀代の物で、長さ6.2 m×幅1.0〜0.6 m（ソウル・ドライブ社『慶州』）。こんな舟では、日ごろの漁撈の腕前も、倭国南岸沿いの黒潮に乗ったら、一たまりも無く漂流する。すなわち、伊豆半島南端に集中的に漂着した原因とみられる。

上陸した彼らは早速、稲・農作物栽培の開拓である。伊豆は気候温暖。噴煙する霊峰富士。いたる所に湧く温泉。動乱、徴兵、酷税にあえいで来た彼等には、まさに「神坐ます所」であって、「加茂」と名付けて励み、生まれ故郷とはぶつり縁が切れて、『韓国の歴史』から忘れ去られてしまったと見られる。

(三) 醍醐天皇延長五年撰進の『延喜式神名帳』はまだ加茂から遷

座していない。朝廷は、起伏の多い山野を二〇〇〇余町歩平らな耕地に拓いて（現在地に）遷座した時、「伊豆国一の宮、正一位勲一等三嶋大明神」と嘉賞した。それ以前、三嶋神社に三原郡（島）から「伊古那比咩神」を迎えたが、祭祀した時期も、遷座の時期も詳らかでない。



「遠島」の罪状で伊豆に流された源頼朝は、いたく感動し、平家追討の旗上げには戦勝の祈願をし、神領もしばしば寄進した。鎌倉幕府になっても厚く崇敬された。

室町幕府八代將軍足利義政の怠慢な政治により関東が大いに乱れた。古今和歌集伝授者当代切つての武將歌人美濃国郡上東常縁申次（人語用）を征討將軍に任じ、三嶋神宮を本陣にして鎮圧を図つた。その時関東歴遊中の連歌師僧宗祇が、陣中の常縁に「古今伝授」を懇請した。以下、日本歌道史に残る有名な事件だが省略する（『大和村史（通史編上巻）』）

——話を太古に戻すが、開拓伊豆国がヤマト政権に降つたのは、いつの代かという事。三嶋大社の祭神には伊古那比咩神の外に大山祇神・事代主神を祀っている。大山祇はさておき、事代主は出雲国譲りの大国主の子である。出雲開拓が大勢の韓国伊太氏神を祀る。伊豆開拓にも前記の通り三神の氏神を祀るので、伊豆国がヤマト政権に降つたのは事代主の図いであつたと理解される。

日本や韓国の古代神話が、『延喜式神名帳』に、真実味をもって秘めているように見られる。

江戸時代、東海道三嶋宿として繁昌し、朱印領五三〇石を受け、農業に無くてはならない暦「三島暦」発行を許されるという破格の扱いを受けた。

## 第五節 北九州の弥生稲作、豊川より北上、

### 西三野王国（仮称）ヤマト政権の支え

前図に示したように、北九州遠賀川流域の土器等を携えて、瀬戸内から紀伊半島を迂回し伊勢湾東岸から、豊川・水神平に辿り着き、豊川に流れこむ数条の小川のある五町歩ほどの湿潤地帯に「弥生稲作」を始めた一団があつた。

⑨遠賀川系土器の神戸市大開遺跡・東大阪市若江北遺跡と、水神平遺跡の遠賀川系の最古の壺・甕を比べた時、大きな時間的格差が認められない（新城市教育委員会提供雄山閣出版佐藤由起男著『縄文・弥生移行期の土器と石器』）。

「水神平遺跡」の土器・石器は、たちまち東海地方中心に広まり、一つは長良川沿いに北上し、郡上市明宝小川・同大和町に到着して、原始稲作の開拓が始まつた。

⑩三千年前頃の郡上八幡町の、年平均気温は一二・五度、二千年前頃は一二・三度、二千年前頃は一二度であつた。（八幡町鍾乳洞最上部の鍾乳石の酸素同位体比から推定した古気

候変化グラフ」名古屋大学理学部『化学第33巻第2号』。

右のように三〇〇〇年前の郡上八幡の平均気温は、稲作栽培が可能だったわけである。

なお、グラフは、二万年前が一四・八度、七千五百年前が一四度、である。(昭和四九年『大和村史通史編上巻』第三章「原始集落から古代国家の成立」)。(第一〇節の「津軽王国」へグラフ転載)

物部氏の始祖饒速日命はヤマト政権が畿内大和に、政権の拠点檀原神宮を建てた時助力し、以降、倭の所々に「弥生稲作」を拓いたムラ・クニを攻略していった(物部というのは強力な武器を持ち軍事・警察権・農事・祭祀等を兼行し、政権最大の部氏として活躍(新編物部氏家系書辞))。

ヤマト政権の美濃地方への進出の先陣は開化の皇子彦坐とみられる。さらに三野国に入った景行は、同地豪族牟義都の娘を娶って大碓を生む。弟の小碓は日本武といって全国各地を攻略して行く。

彦坐の第二王子神王根は三野前の本巢国造となり(古事記)、また彦坐の子鴨君が加茂地域の県主(後、鴨県造)。尾張連系八坂入彦が可児・土岐地域に進出して県主になった(県主は政権への直屬。性が国造より強い)。また、物部系の角鎧が三野県主(後、三野)。大碓が牟義都国の娘と婚姻しその子孫が牟義都国造となった。

なお、牟義都国造領の北方の郡上は、「郡上の上県・郡上の下県(仮称)」というヤマト政権の直屬領となり直屬部民となった(後述)。

①平成一九年大垣市文化財保護協会刊白井千吉著『美濃国と国分寺の成立』を頂いた。次に要点だけ抄出するが、「弥生稲作」を開拓した王国を「西三野王国」(仮称)とする。

円墳・方墳(以上韓国系で生前に築く風習)・前方後方墳(初期物部氏系で、没後築くと推定)・前方後円墳(ヤマト政権特有で、天皇・皇族・武将の死後築造)。六世紀〜七世紀古墳は家族墳が多い。

大垣市教育委員会発行誌中「西濃地方の主要古墳及遺跡分布図」には、前方後方墳七基・前方後円墳一六基認める。墳長一五〇m昼飯大塚古墳は県下一で、大碓皇子の墳墓と比定されている。

②昭和四年墳丘の土を製瓦用に掘採中、鉄器・銅鏃・木棺・銅鏡・鍬形石など通行人の目に留まり、地域のマニアが発掘記録し、東京国立博物館に収蔵したが、取り扱ひ中に一部紛失したとか(一番珍重な品物がうしなわれやすい)。墳長不明の矢道長塚古墳は前方後方墳であった。有力な物部氏の墓である事が記録図面でわかる。内行花紋鏡一面・神獸鏡一面・鍬形石三個・石釧七六個・勾玉七個・管玉二三〇個・狛柄劍一振・鉄刀九振・銅鏃一三個・瓶形石製品二個(祭祀用具)

等）・合子（香料を入れる器）青銅製か）・ハク小玉一七個。

〔三〕物部多藝連、『和名類聚鈔』に、「多藝郡物部郷に住居した伴造（とものみつじ）。この郡には神名式（かみなむしき）の多藝神社を祀る」。また、「宝亀八

年一二月紀、美濃国多藝郡の人、物部坂麻呂等九人、物部多藝連の姓を賜わる」（秋田書店刊『新編姓氏家系辞書』）。と見えるので、世紀前にヤマト政権を担った物部の有力長七人が「西三野王国」に派遣されて服属させ、以来その子孫が治安に骨折った事を朝廷は嘉賞し、一度に九人が地位の高い連姓を授けられたという事を意味しよう。

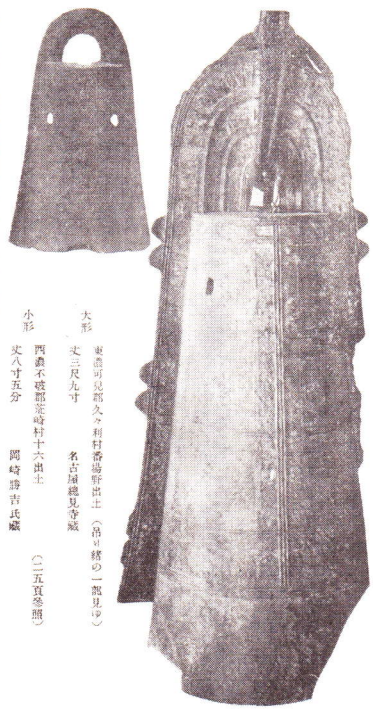
『日本書紀・神武紀』に「はるか東の地の大きな邑に君主がおり、小さな村にも長がいて、おのおのが境界を分けて、互いにせり合っている。その地に一足早く饑速日（にきはやひ）なる者が入っていると聞いたので（大邑の長饑速日ながす）、神武もそこへ行つて都をつくろうと決意した」と、物部の活躍に期待をした。そして、大和に足場を作ったヤマト政権が東国へ進出するためには、西三野王国の征服が最先決だったので、物部の長級七人を派遣したというわけである。

〔四〕西三野王国の墳墓はどこか。前述した越前国の気比神宮・出雲国の出雲大社・伊豆国の三嶋大社、そしてヤマト政権の檀原神宮も、王国や稲作平安を祈願する神々の社であった。

しかし、関ヶ原（せきがはら）の合戦で南宮大社は焼かれた。戦争は古来、焦土戦術である。関ヶ原合戦記を見ると、南宮大社の存在が、

両軍の動きの中に目障りになるような所がある。どちらが焼いたか知らないが、徳川三代將軍家光により、美濃国一ノ宮にふさわしい大規模な再建が行われ、朱印料四百余名が寄進された。

しかし、貴重な文書類・資料が焼失し、西三野王国の由縁や、物部氏らの動静が薄れてしまった事は否めない。大社の主神は金山彦（かみみやひこ）という鉾山の神であるが、広大な南宮山のどこかに西三野王国の墳墓があるに違いない。西美濃地域に、韓国系の円墳・方墳を見ないからである。大正一二年刊『濃飛両国通史上巻』の口絵写真に、小形銅鐸、明治三〇年頃西濃不破郡荒崎村十六出土、文八寸五分、岡崎勝吉氏蔵。通史の本文には、七ページにわたって、この銅鐸の重要さを述べている。戦災等で焼失していなければ、ぜひ公的機関に収めて展示されたいものである。超国宝級とみなすからである。



大形 東濃可兒郡久々利村番場野出土（格目緒の一節見ゆ）  
文三尺九寸 名古屋總見寺蔵  
小形 西濃不破郡荒崎村十六出土  
文八寸五分 岡崎勝吉氏蔵  
（二五頁参照）

〔写真〕『濃飛両国通史上巻』掲載

## 第七節 郡上の上県・同下県（仮称）

昭和四六年<sup>(一九七二)</sup>、大和村名皿部白山神社所蔵の棟札に「奉造立、縣大明神御社<sup>(一)</sup>、明和三丙戌歲九月一五日、名皿村錠主三郎兵衛」と書かれているのを発見した。『白鳥町史史料編』安永二年「郡上領留記」にも「名皿部村社頭三社」。美並村根村神名神社本殿に「阿賀田大明神」、同苧安白山神社境内社「阿賀田社・泉明神堂四尺・五尺」と記す。従って、『美濃国神名帳』・『新撰美濃志』・『岐阜県神社明細帳』から三六件の県神社を選出して、所在地・祭神・創立・由緒・周辺地域の古墳基数、等の分類図表を作つて、村史委員会で検討された。

複雑な検証過程は省略するが、美並村吉田以北を「郡上の上県」、以南美濃市曾代<sup>(二)</sup>までを「郡上の下県」と推定された（遠藤慶隆が豊臣秀吉に降るまでは、曾代・立花は郡上領）。

その郡上の上・下県として、ヤマト政権に降つたのは、開化天皇皇子彦坐命<sup>(三)</sup>を三野に派遣して征服した時と見られる。『日本書紀』には、越に荒夷<sup>(四)</sup>がいて容易に進入出来ない記述がある。そのため、荒夷が長良川筋を南下して、平定した三野・尾張を荒らされる心配があつたので、牟義郡国造領、北方の郡上を、直属領にして直属の県主を派遣したとみられる。大和町の三か所に古墳群（薬師平・河辺・福田）があつて、立派な長刀・副葬品が出土している（大和町歴史資料展示收藏館）。弥生稲作を経営して

来た郡内のムラ長・民は、県の部民として、ヤマト政権の支配に入ったわけである。

大宝元年の律令制<sup>(五)</sup>（刑法と行政法を）のもと、郡上は武義郡に編入された。しかし、文德天皇齊衡二年、武義郡から分立し、郡上・安郡・和良・栗垣の四郷で郡上郡が成立した（戸は平均五〇五人）。

薬師平古墳群（頂上・龍併せ）は、「白雲山古寺遺跡」の南方八〇〇mほどの位置にある。明治期に地元民によつて発掘され、五獣七鈴鏡一面（県重文）・七〇cmの短刀一振が保存されて来た。鈴鏡は県の巫女によつて神前で踊り振られたと推測される。鈴鏡は岐阜県内に六例ほど見られ、県と推定される地域から出ている。

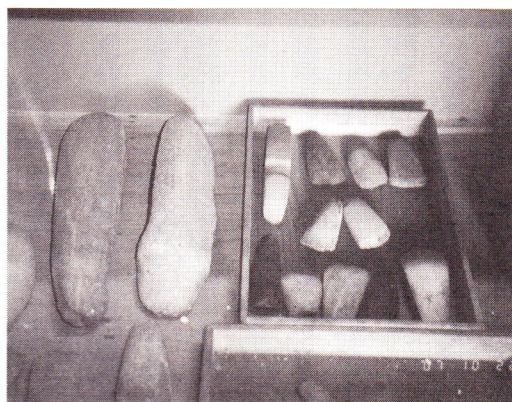
## 第八節 明宝の小川浄福寺と歴史民俗博物館、

### 弥生時代の日時計金山巨石群

小川集落は「近年まで一〇〇戸ほどが今は七〇戸ほどになり、水田面積も四〇町歩あつたが、今は休耕田が多い」（西脇建設株式会社社長西脇源正さん談、元明宝村史編集協力員）。

その小川集落へは明宝中学校の裏山から、県道金山明宝線で、かなり長い小川峠を越えて入る。集落唯一の真宗西本願寺派浄福寺には、昭和の初めから貴重な収集・出土遺物が数多く寄せられ、先代お庫裏様がよく保管されて来た。先土器時代石器、縄文時代土器、白色硬質泥岩製弥生式柱状抉入片刃磨製石斧（日の目の役）一個、定角式薄刃磨製石斧（手斧の役目）八個、蛤、刃形石斧（採採・断木削）、





石庖丁（標を切り切る庖丁）等々の弥生時代の用具や、以後の遺物がある。一〇cm四方の青銅板に座像の釈迦如来、五cm四角の中国神宗朝代「元豊元年」銘の銀貨、等の逸品もある（管理者末武貞一さん）。

また、「明宝歴史民俗博物館」四万七千点の資料には、太古からの遺物も多く収蔵されている。当時の中学校長故金子貞二（ていじ）さんに、村民が懸命に協力して集め、整備されたもので、国重文の民俗資料も含まれている。なお、金子さんは、『明宝村史史料編』『同通史編上巻』『同下巻』を完成直後、急逝された。

その他、郡中を精査すると、先に図示した「稲作の伝来経路」のように、敦賀に上陸したのと博多に上陸したのが、郡上で合流している事が明らかになる。浄福寺や明宝民俗博物館所蔵遺物が、それを証明するわけである。

弓掛川の源に当たる小川集落は、数条の谷川が集まる小盆地で、

標高五五〇mの別天地。弓掛川を降り馬瀬川と合流し、元郡上郡東村（下山町）をさらに下り、和良川と合流する岩瀬に「金山巨石群」という三巨石群「岩屋岩蔭遺跡巨石群・線刻石のある巨石群・東の山の巨石群」がある。近年、九州高等学校歴史教育研究協議会編『図説世界史』の中に、三巨石群は「日本の日時計の原点」で、二五〇〇年前ころ設定されたものと推定。

①日本の稲作・農作物は、「月読尊」という神の太陰暦によって、明治初年まで栽培されてきた。しかし、太陽暦より約一日も短いので、三年に一度閏月を設けて、太陽暦の二四節気（八月四日立春、五月六日立夏、二月四日立秋、九月六日立冬）に調節して来た。天智天皇（六七〇）の漏刻日時計が太陽暦にどう関連づけられたかは知り得ない。けれど、三〇〇〇年前九州全域に弥生稲作が発生し、二五〇〇年前、こんな辺境地の巨石群が、日時計として太陽暦に換算し得る施設だった、という研究成果は日本歴史からも高く評価されよう。その施設が後の農業にいかな影響を与えたかというテーマにも、九州歴史教育研究会の取り組みが期待されよう。

②「美濃国神名帳」は、「延喜式神名帳」撰進後一五五程経て、天慶（九六八、九六〇）天徳年頃までに修撰された官簿である。全国の神社の昇進は鎌倉期建治年中までに九度あって、従三位以上の神階だけ昇進する（『濃飛両国通史上巻』）。四位以下は当初のままで、位階は、辛く値打なものだった、という事が言えよう。

小川白山神社は永享五年勸請、同浄福寺正保元年草庵道場、

後寺号。という江戸期の成立なので、古代・中世における氏

神・農業守護神がなけねばならない。ところで、「美濃国神

名帳」(郡上郡七社)のうち、正六位上国津明神(和良村澤、

九頭竜神社)は明治七年八月改称し、戸隠神社・手力雄命

として、往古より巨石(天岩戸岩)を祀り、各何百石もの巨

石二個が積み重なる(『郡上郡史』・『濃飛両国通史』)。しか

し、小川集落からはかなり遠いので、小川の「白山神社永享

五年勸請」には、大きな疑問を持つ。すなわち、山間僻地で

は、小集落が点在していて、それぞれが天神・地祇(土着の

神)を祭祀したと見られるからである。

## 第九節 弥生稲作八戸王国(仮称)末裔の祭り広場

三〇〇年前の朝鮮半島動乱の難民は、倭に逃避して、農作・

稲作を始めた。それが、

①朝鮮半島から、対馬海流に流されて津軽に着き、垂柳遺跡周辺に稲作を拓いた者と、

②朝鮮半島から北九州へ回り、瀬戸内↓伊瀬湾岸↓豊川↓関東・東北を経て、八戸荒谷遺跡辺を拓いた者とで、両者に二世紀ほどの格差ができた。

③(昭和二五年頃)から東北大学等により、東北地方の遺跡発掘調査が始められた。水田跡・水路跡・畔路跡、靱痕付着土器・

北九州遠賀川系土器、木製鋸・杵・臼・斧の柄・容器類、石庖丁・蛤刃磨製石斧(木割り斧)・薄刃石製手斧(木割り用具)等々、最北の青森まで、弥生の遺跡・遺物が多数出土し、原始の倭神話時代の東北の歴史が明らかになって来た。

先ず、二〇〇七年八戸市南郷区役所建設課刊『荒谷遺跡』(八戸市教育委員会提供)という精細な発掘調査書から、見ることにする。

(一)03年、遠賀川系土器発掘。器高一三・三cm・器幅一四・三cm・重さ四九九g。土器内の炭化物年代の測定値はB.C.一七〇〇±四〇だった。この深鉢形土器をもたらした先進地、愛知県水神平遺跡出土の遠賀川系深鉢(器高三七・六cm・胴径三〇・五cm)に酷似する(豊川市一宮町教育委員会刊『一宮町文化財シリ―ズ4・縄文・弥生時代、土器・石器』)。

この深鉢にはメノ―一四個(幅六・二五(一・六五cm)が収納され、傍らに砂岩ホルンフェルス(頁岩・結核岩等の変性物で緻密硬質)製弥生式柱状抉入片刃磨製石斧(長さ二二・一cm・幅三・七cm・厚五・三cm・重さ八〇三g)一個が添えてあった。この石斧は、岐阜県郡上市大和町剣「白雲山遺跡」の蛇紋岩製石斧より、かなり後代の物と見られる。白雲山の石斧は韓国「慶州博物館」の物と質・形状共酷似し、刃先が急角度なのに、この石斧は大変緩い角度だからである。同市明宝小川の淡青色粘板岩製石斧も刃先が急角度である。いづれにしても、祭祀用に供され、神霊を招き寄せた

依代とみなされる。

巻頭の搜画「旧南郷村地図」を見ると、新井田川は遺跡の西側を流れ、南郷村の中心区・島守を縦断して八戸港へ注ぐ。その新井田川の急な氾濫は奉安していた依代を運び出す間も与えず、土石流深く埋没させた。B.C.一七〇〇年前である。島守区は長さ約3.5 km、幅0.9～0.3 kmで、新井田川を灌漑に利用した水田は、最大一五〇町歩くらいと推算される。そして、区内に竜興神社、福一満虚空蔵菩薩堂の外に、六か所に神社を認めるので、稲作の安全豊作を祈願する天神地祇の祭祀が、後代まで重厚に行われていた事が知られる。

(三)小礫下の炭化物として、稲の胚乳と穎(禾)が検出された。胚乳は、長さ4.5～5.5 mm・幅2.0～3.0 mm・厚さ1.5 mm。穎(禾)は、長さ6.0～7.0 mm・幅3.0～4.0 mm・厚さ1.5～2.0 mm。等と測定され、長楕円型の南京米と俗称される東南アジア～中国産系の米と推定される。確定には、遺伝子DNAの検出が必要である。

八戸市役所南九〇〇m辺の長者町(1)～(4)に、新羅神社があり、八坂神社・大慈寺・南宗寺・禅源寺等に囲まれ、糠塚もあって「長者まつりの広場」として、一町歩以上の場がある。四つの長者町が、古来大切に祭祀をして来た八戸王国の名残りとみられる。

## 第一〇節 津軽王国(仮称)の盛衰、津軽藩苦難の道

昭和五六年、国道一〇二号バイパス予定地の試掘調査によって、弘前市田舎館村垂柳の現場水田下から、弥生時代の水田跡が一枚ほど発見された。重視した青森県教育委員会により、翌年から、道路予定地内を、幅四〇m、長さ七五〇m(三万平方m)にわたって発掘調査した。六五六枚の水田跡・0.6m幅の用水路・3.0m幅の大畦が発見された。水田面積最大六・八坪、最小〇・三坪、計測可能な水田跡二九六面の平均面積は二・四坪。大畦上から多数の弥生人の足痕が白い粘土質シルト(沈殿)の中に現れた。このシルトが、水田跡の発見を可能にした。(八戸市教育委員会提供『青森県史資料編考古3』部分複写)。

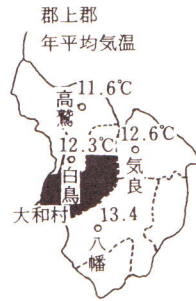
①(一)垂柳遺跡から、30～24km南の分水界に高山が連なる。その分水界から、無数の小川が岩木川(別称津軽富士を源流)に集まって、弘前城の西を流れ、津軽半島五所川原市十三湖に流入して、日本海へ注ぐ。

(二)原初時代の水稲は、湿地に田んぼを作り、種籾の直まき栽培であった。直まきは、田を満水にして畦から散布する。田に入ってまくと水がにこってまけない。しかも田が広いと水の反射で、散布種子が見にくい。田を小さく作れば、畦に立っていて種がまける。稲穂刈りは、湿地に足がめり込まないよう、畦から刈る。仕事の能率もよい。インドネシアの或る種

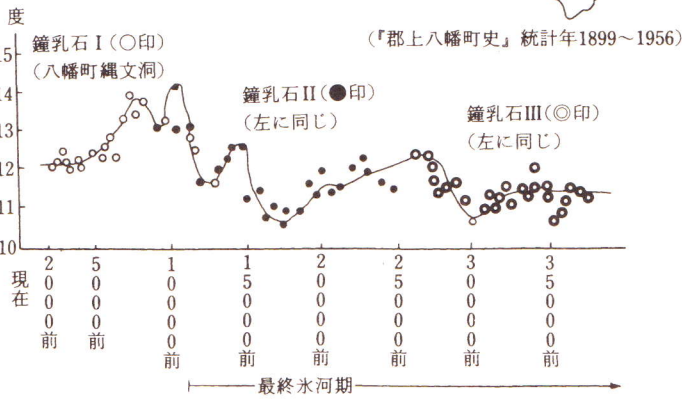
族は、昔ながらの極小田に、今も（昭和四〇年代）田植えをしている所があるという。

(三)名古屋大学理学部が、岐阜県郡上八幡町安久田鍾乳洞内で、一番地表に近い鍾乳石を採って、その成長年輪を測定し、古気候の変動を推算してグラフを作った。『化学第33巻第2号』

「鍾乳石の酸素同位体比から推定した古気候の変化」である。



「鍾乳石の酸素同位体比から推定した古気候の変化」  
『化学第33巻第2号』  
備考 鍾乳石 I・II・IIIの記号は村史編集者の付記  
(測定のために三本の鍾乳石が用いられた)



このグラフによると、七五五〇年前一四〇°C 切りから、気候が

下降線をたどり、三〇〇〇年前までは、一二・四度〜一二・〇度を示している。郡上八幡町から一二kmほどの北隣り、大和白雲山麓の水稲栽培の夏は、二五〜三五度くらいと推測される。

その郡上八幡・大和白雲山麓は、越前敦賀から八〇kmも内陸に位置しているので、気温は、二度くらい低いとみられるのに、南京米と俗称された南方インド系米栽培に差しかえない安全気温だったわけである(二)(三)は、昭和五九年刊『大和村史通史編上巻』。

津島暖流は、朝鮮半島・対馬間を速い潮流で、日本列島の沖合を北上し、狭い津軽海峡を、津軽暖流という急潮となって、太平洋へ噴出する。時に千島列島の南側を南下する寒冷な親潮に、直入する事なく、三陸(陸奥・陸中・陸前)の沿岸沿いに南下する。そうして、前掲の気温は、B.C.二五〇〇年くらいまでは、一二度を上回っているの、拙地・津軽地方共、夏の稲作は安全な気候圏にあった。従って、その五〇〇年間に、左記の砂沢遺跡が示すように、大量の種子を要する直まき栽培から、灌漑の発達で、広い野に幾つもの溜池・温み田・長い温み溝を作り、広い田を作り、苗代の苗を使って田植する法に変わっていった。上流の湿地帯から、洪水に安全な下流地帯を選んで開発し、津軽王国(仮称)



なるや、冷夏・旱天・飢餓が連続し、疱瘡が大流行して夥しい死者が出た。美濃国守は穀物を放出。諸国も同様に難民が激増したので、庸・調の雑税を免除。兵士は逃亡し、各地に強盗が横行。山間地には暴動、同族争い。京都では掠奪が頻発。東山道の重要な坂本駅(濃美)の駅子が逃亡(駅馬集まらず、駅の食料も尽き)のため駅の機能が麻痺した。当然、廃田が急増し、畿内外の律令制は危機に墜ちた。実は、文徳天皇斉衡二年、武義郡から郡上郡が、多藝郡から石津郡が貧困の余りに分立させられた(「太政官符」美濃国司解)。

①弘仁一一年成立『弘仁式』四〇巻は、行政の細部にわたって詳細な決め事が載る官公吏の手引き書であったが、たちまち反古同然となった。一部が『延喜式』の紙裏に書かれているのを侯爵九条家で発見した黒板勝美さんは、昭和一二年新訂増補『国史大系第二十六巻』に収めた。大変な欠簡残欠本「式部」「主税」だが、貴重な文書である。「主税」は前欠のため四八か国分しか無い。参考のため、次に数国分抜出する。

(一)陸奥国。正税六十万三千稲束、国府六十万八千二百稲束国司料五十一万一千二百稲束、東鎮官料九万七千稲束、祭(釜のかみ)塩竈かまじのかみ神料一万稲束、学生料四千稲束(陸奥国は山形・秋田の出現国を除き、福島県以北青森県までとする)。「延喜式神名帳」も「陸奥国一百座天・五座小入五座」とする。

●上野国。正税六十五万稲束、国府四十万稲束、国分寺料五万稲束、興福寺料三万稲束、薬師寺料一万稲束(定・野王国馬)。  
●越前国。正税・国府各五十万稲束、国分寺料五万稲束、

京法華寺料三万五千稲束、薬師寺料一万稲束(最前王國惣定分立一年は加賀國表分立)。  
●出雲国。正税・国府各二十六万稲束、国分寺料四万稲束、薬師寺料一万稲束(定・島根國)

●備前国。正税・国衙庁各三十八万一千一百五十稲束、国分寺料四万稲束、大学寮料一千稲束

●備中国。正税・国衙庁各三十万稲束、国分寺料三万稲束、修造□溝料一万稲束(□は替書)

●備後国。正税・国衙庁各二十四万稲束、国分寺料二万稲束(備前・備中・備後國に古備王國惣定、國山縣)

●筑前国。正税・国衙庁各二十万稲束、国分寺料□万稲束、国衙庁十五万稲束(筑前國惣定)

●筑後国。正税・国衙庁各二十万稲束、国分寺料二万稲束、国衙庁十万稲束

●肥前国。正税・国衙庁各二十万稲束、国分寺料四万稲束(当国惣校、國六万稲束、國二万稲束)、国衙庁十五万稲束(筑後國久留米出、肥前國佐賀・長崎県に新惣國惣定)

●肥後国。正税・国衙庁各四十万稲束、国分寺料八万稲束、国衙庁三十五万稲束(府官は博多太宰府)

(二)宝亀一一年、国衙庁・鎮守府である陸奥多賀柵城(多賀郡)は略奪放火された。王朝への反逆として鎮守府・守備兵を強化した。すなわち「およそ五畿内伊賀等の国地子は正税に混ぜ

よ。それ陸奥の諸□(替書に)並びに鎮兵糧に宛てよ」(とは公田を小作する場合)

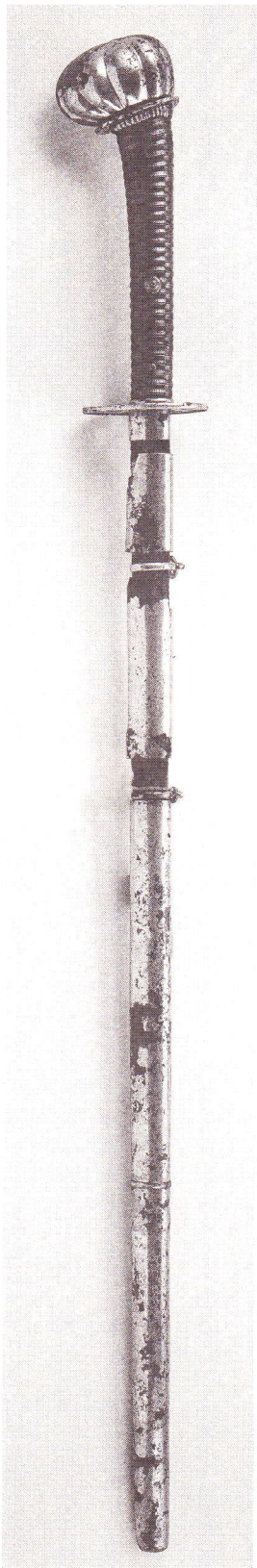
その上にある。板東に「平将門の乱・天慶の乱（九三六）」  
 が起きた。板東平氏一族を統率し、常陸守藤原経近の国府（茨城）  
 を焼いて経近を捕らえ、下野国府（栃木）も攻め落とし、上野  
 国府（群馬）を占領して新皇と名乗り、関東ばかりか陸奥も  
 従えた。参議藤原忠文が征夷大將軍に選ばれて、将門を追及  
 し、下総国辛島（千葉）に捕らえて誅殺した（河出書房『日本  
 歴史大事典・歴史年表』）。将門の乱は、国家存亡危急の時、  
 栄耀栄華奢る藤原氏に対する反逆ではなかったか。板東平氏  
 は将士農一体になって開拓するという気質があった（『金沢文  
 庫』東氏本、『大和村史通史編』東氏・遠藤氏）。

(三)消滅！金冠の関東大王国―欠簡の『弘仁式』・「将門の乱」・  
 『檀原神宮宝物図録』群馬県藤岡市稲荷山古墳出土金象嵌銘  
 文入り鉄剣の発見、及び群馬県地理（昭文社）等により、同  
 県に金冠着帽の大王国のあった事が想定されるようになった。  
 群馬県は、北辺に高名な上野三山（妙義山・棒名山・赤義

山）があり、無数の小川が集まって水量豊かな利根川が南へ  
 貫流する。その山麓は県面積の三分の一ほど、開拓可能な平  
 地を持った。しかし、現代の開拓はすさまじく、平成五年地  
 図に載っていた左の古墳・所在町名は、平成二〇年の地図に  
 は跡形も無く消えてしまった。

金冠塚古墳・亀塚山古墳二子古塚（前橋市）、前二子古墳・中二  
 子古墳・後二子古墳（同市西大室町）、大國主神社（延喜式神名帳小  
 山神社二社（越前国白山比咩神社が総社、同市上沖町）等  
 がある。

さらに遠く奈良檀原神宮に、奉納宝物・群馬県藤岡市古墳  
 出土・金銅装頭椎太刀（拵一六四cm）を展示し、解説に  
 「大刀の柄頭が握拳のように卵形あるいは楯状にふくらんで  
 いるので、この名称がついた。柄・鞘は木質の上に細かい装  
 飾を施した金銅板で飾る最大級の飾大刀は身分の高い地方豪  
 族を示している」と記すが、出土鉄剣に丁寧な装飾をして奉



▶檀原神宮奉納の飾大刀（一六四cm）

納した者・出土古墳名・出土時期等は一切記していない。

(四)昭和四三年発掘された藤岡市稲荷山古墳の鉄剣(長さ七三、五

cm)が、同五三年奈良元興寺文化財研究所において、金象嵌銘文、表・裏に計一一五字刻まれているのが発見された。左

に筆者の解読を記す(『国史大辞典』の銘文参照)。

(表)辛亥の年七月中、記す乎獲居臣。上祖の名は意富比埜(八代孝元)。

その兎の(名)は多加利足尼。其の兎の名は弓已加里獲居。其

の兎の名は多加披次獲居。其の兎の名は多沙鬼獲居。其の兎の

名は半弓比。裏其の兎の名は加差披余。其の兎の名は乎獲居臣。

世々、技刀人(天皇の)の首(首は新羅姓氏家系)と為り、奉事(仕え)し

来り今に至る。獲加多支鹵大王(二代)の寺・斯鬼宮に在る時、

吾は天下を佐治(推賢)し、此の百練の刀を作り、吾が奉事の

根原を記さしめる也。

(五)二〇〇八年昭文社刊『関東道路地図』の「関越自動車道・藤

岡Jct」を中心にした一〇km四方内に、①浅間山古墳②観音

山古墳③軍配山古墳④梨ノ木山古墳(高崎市)⑤七輿山古墳⑥

稲荷山古墳⑦本郷埴輪窯跡(藤岡市)等がある。そして当地域

は、碓氷峠↑上野国↓常陸国(県橋本)に通ずる東山道と、関東

↓越後国↓陸奥国(青森県)に通ずる道とが交叉する要地である。

利根川右岸支流烏川・鐺川・神流川等の流域であり、弥

生原始稲作が開発された最適地である。稲荷山鉄剣は七三、五

cm、榎原神宮奉納拵え一六四cmの大刀は、右の七輿山古墳出

土で、国造乎獲居臣の最初の先祖の遺品と推察される。

そして、この一〇km四方が征服のヤマト政権から授かった

封地(領地)であったとみられる。

いずれにしても、関東方面に移住定着し、上野の広い土地

を開拓して金冠を戴し、大王国になって同地方に君臨した。

それが孝元王子大彦に征服され、その子孫が上野国造を継

承し統治して来たものと推定する。

第一一節 九州邪馬台国(想定) から饒速日の盤舟河内へ進出

(一)三〇〇年前、朝鮮半島の動乱により、温和な倭の所々へ庶民

農民が避難移住して、直ぐに稲作・農作を始めた(第二章 第

一節)第一一〇節参照)。温暖で水豊かな阿蘇高原に阿蘇比咩神を

奉じて入植開拓した族は、下流の肥後(熊本)の北辺にまで増殖

したが、「健盤龍命」(国造)に征服されたようである(第三章 第

二節)ところがその熊襲族がおおヤマト政権に叛いたので、景行皇子

小碓により、族の強豪川上梟帥を刺して当人から日本武の名を

頂いたとか。仲哀・神功が朝鮮半島内乱鎮定の時、筑前檀日宮

(福岡宮)に駐屯し、竹内宿禰を筑紫(肥前・筑後)に遣わして

逆賊を平定したとか。等の記紀伝説がある。

筑前を開拓して二万余戸に増殖して、ヤマト政権に征服され

た奴国の経緯については第三節に述べた。

(二)邪馬台国(古田武彦氏が諸書を探り「邪馬台」は七万余戸に増殖した倭最大の王



国である。それが戦後「九州説」と「大和説」に分かれて激しく論議されて来たが、いまだ結着しない。二万戸・七万戸とは巨大な人口である。大宝元年律令国家として日本国が発足した時、「美濃国断簡戸籍」(正倉院文書)一戸平均は一五口であるから、少なくとも、奴国は三〇万口以上、邪馬壹国は七〇万口以上あったとみなされる。

(三)もし、邪馬壹国は「大和」にあったとすれば、その地域に遺跡・遺物がごろごろしているはずと考え、まずヤマト政権初代天皇神武即位の橿原神宮を訪れておどろいた。石鏃一一個、縄文時代紀元一〜二世紀ごろ橿原神宮外苑ほか出土。長頸壺三個、弥生時代紀元一〜二世紀ごろ同外苑出土、等が最古の出土遺物であって、出土時の写真も展示してあった。奈良国立文化財研究所に問い合わせても、納得のゆくものではなかった。

従って、「邪馬壹国」は九州に有り、と想定して、前述以外の関係機関佐賀県・長崎県(国肥前)及び久留米市教育委員会(国筑後)に対して資料をお願いした。重厚な資料送付に激され、『延喜式神名帳』・『弘仁式』・『盤井の乱』等を追検して、表題「第一一節」を解明してゆくことにする。



『久留米市史 第十二巻資料編・考古編』は市の全古墳・遺跡の記録である。1内畑古墳 円墳径約二五m。前室・後室の複室

横穴式。後室からガラス玉・勾玉・高杯須恵器各一点。前室から鉄器類(兵庫鎖・鏃・飾金具)、耳環。羨道部から須恵器杯蓋・高杯・提瓶・平瓶・甕類。馬具の鉄地金銅張り台座の飾り金具の鏃は五弁の花模様。鉄鏃は二〇数本。古墳築造は六世紀後半、七世紀の追葬も確認。2前畑古墳 円墳径約二〇m、天井石三個に二重同心円文。耳環二個、鉄鏃約七〇本、刀子二本、桂甲小札(肩にかけるよろいの小さなもの、五世紀代朝鮮より伝来)、馬具(雲珠(馬に掛けた飾り)、鐘形杏葉(金杯の前後を止める各器形の楕円))、須恵器(横瓶・高杯・台蓋)。古墳築造年代は七世紀初頭。熊本県北部に次いで、装飾古墳が顕著な地域で、全国的にも独特な古墳文化を展開する。3下馬場古墳 群集円墳。うち径三〇mの円墳は巨石の立柱石に巨石の天井石(大形円墳の特徴)。遺物はタスキ掛けの女性埴輪のみ。装飾文様により築造は六世紀後半。4木塚古墳 前方後円墳(ヤマト政権関係古墳)、墳長約四八m、一九五三年筑後川大氾濫し、堤防構築の時破壊。円筒埴輪多数、形象埴輪(家形・甲形・冑形・馬形・靴形)、須恵器(壺・脚付鉢)、滑石製白玉四個、築造は五世紀後半。5七曲山古墳群 群集円墳。一号墳円墳、墳長一三m余、壮年・熟年男性と壮年男性が頭を入れ違いに埋葬。二号墳方墳、一辺一八〜一九m、箱式石棺二個併列、壮年男性・壮年・熟年女性。三号墳円墳、墳長径一七〜二〇m、盗掘された箱式石棺と未盗掘石棺に短剣一振、土器小形丸埴片一点・甕七個分以上の破片。四号墳円墳、墳長約二〇m、組合せ式木棺二基、出土品皆無。五号墳は破壊のため規模等不明、遺物無し。築造年

代は四世紀末～五世紀前半。6 新婦遺跡 弥生前期の生活遺跡。

周辺に多数の方形竪穴住居跡があつて集落の様相。7 西行古墳群

群集円墳二八基、明星中学校分離校建設中に発見。五世紀～六

世紀代の集団的墓場。一号墳一三・二m余、遺物無し。二号墳一五m、鉄

器片一点、周溝から須恵器・土師器・鉄器、模様付石製紡錘車一

点全国でも数例。三号墳一二m、須恵器蓋付高杯2セツト、鉄製

鋤先一点。四号墳一〇m、少数の甕・壺、土師器小型脚付壺。五

号墳一三m、石棺、ガラス小玉と刀子、周溝から須恵器杯蓋・高

杯・甕類。六号墳不詳、遺物耳環・飾金具・鉄鏃・柄頭の金具。

一五号墳円墳三〇mで群中最大、鉄鏃一点、須恵器把手付コップ

型碗。一六号墳円墳径不明、小ガラス玉三七個、中ガラス玉三個、

勾玉三個、耳環五個、鉄鏃少々、刀子一点。8 礫山古墳 岩利

用の盤棺付円墳四基、全て石枕が棺底に彫られ、各棺接近、女兒

遺骨、弥生土器、奈良時代の藏骨器については子細不明。9 鰐口

古墳 群集円墳。一〇～一三mの円墳、須恵器杯蓋六点、杯身八点、

はそう一点・平瓶一点・土師器高杯脚部片二点、方頭広根斧箭式

鉄鏃一点、刀子一点。六世紀後半～七世紀前半。10 祇園山古墳群

二三・七m×二二・九m葺石隅丸方墳。箱式石棺、盗掘されて

遺骸・副葬品皆無。裾外周に甕棺墓三基・石蓋土壙墓三二基・箱

式石棺墓七基・竪穴式石室一三基・不明七基、計六二基。一号甕

棺墓、遺品半月形半円方形帯鏡片五個、一個に銘文「主銘 吾乍

明□幽凍三商周□無□配彊曾…番昌兮」。「副銘 善同出丹□」、碧

玉製勾玉長四・八六cm二個、甕棺高八五cm余・胴最大径六三cm・

口径六一cm余。第一四・二七・三二号石蓋土壙墓棺内遺品刀子、

三二号に手鎌。箱式石棺遺品皆無だが第一号より短剣片。頭書

の方墳の丘上周辺より一〇～一二世紀初頭の土器、『慶州』によ

れば、当方墳はドルメン式か。11 祇園山古墳 径15m以下の小円

墳群五基。二号墳だけ記録、遺物鉄器鏃・鉈・刀・刀子・鎌、

須恵器杯蓋・はそう・甕、土師器杯・高杯・短頸壺。築造六世紀

半ば以降。なお墳丘下周辺に石蓋土壙墓二基・箱式棺墓一基・壺

棺一基・中世土壙墓一基。石蓋土壙墓のうち北側の棺より成年男

子・女子が頭を別々に並べ、遺品刀・刀子。西側無蓋棺は人骨・

遺品無し。南側箱式石棺熟年男性遺骸。北側に中世の土壙墓、遺

骸無し、遺品土師器小皿四点、竜泉窯系青磁一点(中国・韓国系か、当時。また日本で製作せず)。

12 鏡山古墳 円墳二基。一号墳一三～一五m、工事攪乱、須恵器

杯蓋二点・提瓶のみ、年代六世紀後半。二号墳約一〇m、遺物碧

玉製管玉一一点、ガラス玉二七点。13 ひょうたん山古墳群 数基

の円墳、盗掘。一号墳径約一二m、遺物須恵器数点・鉄鏃五点。

二号墳径約10m、西行古墳群・中隈古墳群・極楽寺古墳群等の石

室とは全く異なり、古墳末期七世紀の代表的な小家族墳。14 釜口

古墳 群集円墳。うち径約一〇mの円墳、ほとんど盗掘。須恵器

甕一・提瓶一・鉄鏃、六世紀末と推定。15 釜口遺跡 径一三m円

墳、組合せ式箱式石棺墓、周溝一か所に土師器高杯・埴(金属を研かす時、使う土器のつぼ)。

器台・土師の高杯は多数で祭祀用土器と推定、鼓形器台は特に

山陰地方に分布して九州地方には無く、被葬者一族の交流関係を推測。16石櫃山古墳 墳長一〇m前方後円墳(ヤマト政 後四世紀)。幕末の久留米藩士国学者矢野一貞が、「国分村石棺図」を同人著『筑後将士軍談』に載せる。大正一三年、三井郡の古墳調査には「石室山」と称して、金の茶釜・壺が出土した事が言い伝えられていると記す。昭和四三年福岡県教育委員会の発掘調査では、前方部損失し、主体部抜き取り跡に、蓋(車の上に立てる蓋)・家形埴輪片、墳頂近くに円筒埴輪散乱の中に器材(醬料の)埴輪が部分的に配置。棺内は大部分攪乱、石棺は「横口式家形石棺」と判明。筑後地方で同様石棺は「浦山古墳・石人山古墳」であるが、石櫃山古墳は浦山古墳より早い時期の前方後円墳である(ヤマト政権が何度も筑後の平定をした事が推察される)。17藤山甲塚古墳 全長約七五m、後円部径約五七mで前方部の短い帆立貝式前方後円墳と判明。同古墳の「藤山」は、書紀景行紀に、九州巡視の道筋に出る。矢野一貞『筑後将士軍談』に「藤山甲塚古墳」と題して「兜」の出した事を記す。また『筑後秘話』に「兜塚、武内大臣連保異国征伐帰朝の時この所に御兜を納むと言う」。古老談に、終戦時盗掘穴が開いていたと言う。石室内部は攪乱、同構造は北九州における初期横穴式の特徴を持つ。埴輪は盾形・甲冑形・円筒・朝顔形。蔵手刀子二本で両方とも把手部分。須恵器無し。「五世紀中葉に比定する佐賀県横田下古墳・福岡市丸隅山古墳だが、特徴は基底部より偏平割石を平積した石室、内部に箱式石棺、石室プランや

構築技法から朝鮮半島高句麗・百済の石室に求められる。と、学  
界に定説化しつつある」。築造は四世紀末〜五世紀初期に比定でき、  
横田下古墳・丸隅山古墳より約半世紀近く遡る。また、天草砂岩  
を用いた玄室の構造は肥後地方との交流がうかがえる。三重県お  
じよか古墳・鳥根県めんぐる古墳等、全国に三五例確認される。

うち八割以上が有明海沿岸地方に集中。本古墳の浦山丘陵には、  
石櫃山古墳・浦山古墳等有力古墳が在り、北部筑後川の善導寺町  
木塚古墳を含め、森貞次郎は「久留米東部古墳群と考え、これら  
形式の石室は「筑紫君一族の墓制として継承されたものであり、  
「磐井の乱」と考え合わせられる」と。18中隈山古墳群 群集円  
墳六基。一号墳は完全破壊。二号墳の墳丘径約一四m、石室崩壊、遺  
品須恵器・土師器・石室内部に装身具。三号墳全長六・四m、玄  
室からガラス製丸玉、前室から須恵器・土師器・鉄製馬具。四号  
墳丘・石室全壊、玄室から勾玉・ガラス製丸玉・耳環・鉄鎌・土  
師器等。19浦山丘陵付近窯跡群 耳納山地西部飛岳二二三m・  
明星山三六二mの丘陵上に、池田窯跡外、須恵器窯・瓦窯等の遺  
跡が点在し、久留米市有数の生産遺跡。平野窯跡、六世紀代の須  
恵器甕破片。山ノ上窯跡、圃場整備で消滅、遺構・遺物不明。下  
柳ノ瀬窯跡、送電線鉄塔工事で消滅、窯跡・遺物不明。

ホイト池窯跡、ホイト用水池北側畑に窯壁の破片散乱、大正末  
軒丸瓦破片一点発見、古墳時代後期から歴史時代にかけて窯跡多数  
存在の可能性あるも、今その多くは消滅。西行山窯跡、焼き損

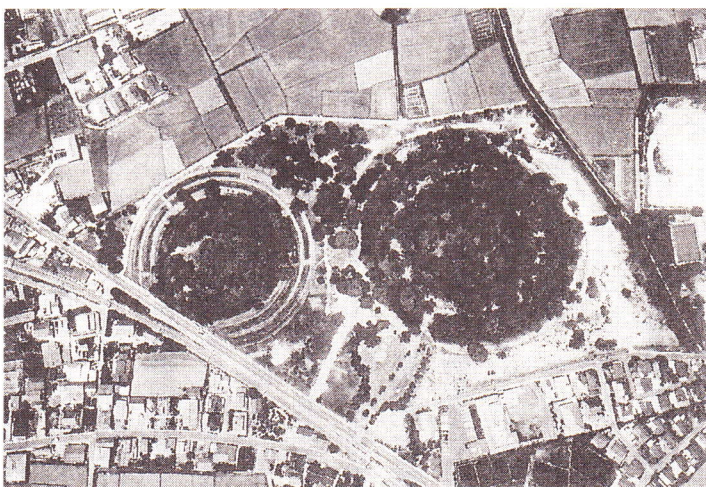
ないの瓦片が多量採集されたが窯本体は未発見。瓦中に「延喜十九年」「弓」の刻したものを採集。筑後国府跡・国分寺跡調査で同一物出土。単弁・七弁蓮花文軒丸瓦は高隆寺跡採集品と同型、国衙・寺院への供給関係を注目。20池田窯跡 二基完形跡発掘、六世紀代のもの、(状況詳述省略)。浦山古墳群・甲塚古墳群・石櫃山古墳群・本山古墳群等が上津荒木川の兩岸丘陵に集中しているので、その需要のため相当数の須恵器窯が営まれたとみるが、現在、池田窯跡・平野窯跡・下柳ノ瀬跡しか知られない。21浦山古墳 自然の丘陵を利用した全長六〇mで、後円部径四〇m・同高六m、前方部幅二〇mの帆立貝式前方後円墳。現在は前方部の大部分が建物で損壊。葺石および埴輪円筒列を確認。横穴式石室、妻入横口式家形石棺、石室は阿蘇凝灰岩使用、同屋根は寄棟形、両側に各二個の環状繩懸突起。蓋全長一・六m、幅一m、高一m。内部一面朱塗、陰刻の裝飾文様。遺骸無く刳取られた石枕跡のみ。むかし勾玉・金環・刀剣・甲冑が出たと伝える。同様の石室・家形石棺に石櫃山古墳・広川町石人山古墳・佐賀市西隈古墳がある。前方部表面採集須恵器は初期須恵器陶村I型式で、畿内陶窯産とみられる。築造は五世紀後半と推測。22平野遺跡 昭和五三年発掘調査。六世紀後半の集落跡、一号住居一辺五・三m方形。二号住居三・三m方形。三号住居五m方形で推定四本の支柱・壁際に竈・須恵器杯・蓋・高杯・甕、土師器碗・甕、鉄製品(鉄鏃・刀子・鎌)。堀立柱建物桁間八m・梁間七・八m、別棟約六m四方で柱間

隔不揃、遺物無し。周辺の前方後円墳や古墳群を見るので、大型の掘立建物は地域を支配した豪族の居館の一部と推定。23極楽寺古墳群 群集円墳。古墳群中三基だけ調査。一号墳径二〇m、羨道・前室・玄室の全長九m、羨道・前室は破壊、玄室から彷彿(和製)の変形文鏡径六・八cm、須恵器・土師器・裝飾品(耳環・管玉・鉄鏃三本・鏢)・馬具等出土。二号墳径約一八m、石室崩壊、玄室は腰石のみ残る、墓道西側墳丘内から土師器小形脚付埴見。三号墳崩壊、玄室から鉄鏃、前室から須恵器・鉄製品、墓道西斜面から多量の須恵器・土師器発見。古墳群築造は六世紀〜七世紀まで営まれたと推測。24日輪寺古墳 前方後円墳全長五〇m。明治四三年発掘調査時、墳丘を削り石室大部分崩壊。石室は厚さ一五cm(?)阿蘇凝灰岩製石障が四壁を巡り、鍵手文・同心円文を交互に線刻、副葬品は彷彿径一三・八cm四獣鏡・玉類・耳環・刀・須恵器・土師器等、東京国立博物館に保管の本古墳出土の楕円形石枕長さ三六cm・幅一七cm・厚さ一〇cm。五世紀末〜六世紀初頭の築造。25北山古墳群 六〜七基の古墳群があつたと古老の話だが、現存は三基。荒れているが内一基が前方部三・四m、全長一五・六mの帆立貝式前方後円墳と確認。出土遺物須恵器(杯・杯蓋・高杯・はそう〔脚部に小穴のある壺形の須恵器〕・平瓶・甕)、土師器(杯・杯蓋・高杯・壺・埴〔金銀鉄類を添ふ寸時用壺〕)、鉄器(鎌・鉈)。築造は六世紀中葉とみられるが、祭祀は六世紀後半まで推測される。26鷲塚古墳市の南東に明星山三六二mその南に飛岳二二三mから市の南

西に派生する丘陵が幾つもある。鍬水丘陵には石櫃山古墳、浦山丘陵には藤山甲塚古墳・浦山古墳・本山古墳、上津丘陵には平野遺跡・極楽寺古墳群、高良台丘陵には鷲塚古墳・二子塚古墳、藤田丘陵には銅矛が大量出土したので、上津丘陵・藤田丘陵には未発見の前方後円墳の可能性がある。さて、高良台丘陵は早くに納骨堂が建設されて公園化し、前方後円墳全長五〇m〜六〇mの鷲塚古墳は破壊。公園建設時、前方部から石棺と彷彿小変形獣帯文鏡一面を発見、原形だけある。27二子塚古墳 本古墳も主体部全く不明。荒木小学校保管の多くの須恵器・埴輪から判断して、鷲塚古墳とほぼ同じ後期前方後円墳で、墳長三〇mと推定。28一の左右遺跡 昭和五八年水資源開発公団が筑後導水路工事の事前発掘調査で発見。付近には中広銅矛一八口を一括出土した天神浦遺跡と、弥生後期の土器編年を代表する標準遺跡として高三瀧遺跡があり、共に重要遺跡。七mの方形竪穴住居遺跡と長軸二m短軸一mの楕円形の屋内貯蔵穴と推定される土坑。遺物に土師器と須恵器のほそ、高杯が多く、杯・鉢・甕・手づくね土器。本竪穴住居は、規模が大きく、出土遺物が高杯と杯が主体である事から集落の共同集会場の建物と推測。五世紀後半の遺跡と推定。

29御塚古墳・権現塚古墳 両古墳は久留米藩士矢野一貞の『筑後将士軍談』に測量絵図を載せる。過去、一帯はイロハ塚と呼ばれ四〇数基の古墳が点在したと言う。大正年間の大規模な耕地整理により、二基の巨大古墳だけ保護、大川鉄道社長深川忠吉が巨

費を投じて、古墳隣接地約三町歩を買収。御塚古墳三重濠の濠再生、権現塚古墳二重濠の浚渫、周堤等の修築、その時多数の埴輪が出土。昭和六年「御塚古墳・権現塚古墳」として、国の史跡指定。指定時に五町歩確保、平成五年市の史跡公園。近年の圃場整備・水導工事等により両古墳周辺に多くの遺跡を発見、弥生時代を中心とした優勢な集落の点在した事を物語る。第一に青銅器の出土が多い。第二に佐賀県吉野ヶ里弥生遺跡に匹敵する多数の倉



庫群・住居跡・環溝を持つ集落遺跡等、古代この地帯が九州随一の筑紫平野の中に広大な穀倉地を開発した。それは「水沼君」の本拠地である。水沼・三瀧という地名、『日本書紀』の記述から十分推測され、「御塚・権現古墳・消滅した銚子塚古墳」が水沼君一族の墳墓であつたろうと結論される（『久留米市史』第一巻に詳述）。

『筑後将士軍談』には、御塚古墳の主体部はすでに盗掘と記録。同墳は主墳六五mに三重の周濠と周堤が巡る帆立貝式古墳。権現塚古墳は墳丘の径約五六mの同式古墳。二重の周濠・周堤。外見上は、両墳とも一三〇m前後の当地最大古墳である。御塚古墳出土の埴輪は形象・朝顔形・円筒形。権現塚古墳の出土は人物埴輪・朝顔形・円筒形。久留米市文化財収蔵館には権現塚古墳出土のはそう・高杯・杯身に混じって、宝珠形のままを有し天蓋部外面に二段の竹管文をもつ新羅系須恵器杯蓋がある。同様な須恵器が大善寺小学校に、御塚古墳出土として保管する。御塚古墳

「慶州天馬塚」出土の金冠（国宝一八八号・一九〇号）



は五世紀後半、権現塚古墳は六世紀前半築造と比定。（写真）高速道路建設時、また破壊）

前述したが、慶州（百万人と言われた新羅の古都）王墓天馬塚を見学した。説明では、韓国民は墳墓を大切に守って盗掘など無かったので、遺物に宝物が多い。五〜六世紀代王墓の天馬塚で、金冠（国宝一八八号）高さ三二・五cm、金製鍔帯・腰佩（国宝一九〇号）・瑠璃杯（宝物六二〇号）・王棺傍の木製用具箱に画かれた天馬図（国宝二〇七号）等、目を見張った。破壊、盗掘は多いが、久留米全域にわたり、佐賀県吉野ヶ里弥生遺跡に劣らない数知れぬ見事な古墳文化は、弥生時代に全盛を極めた名残りであると解せられる。

三〇〇年前倭に移住して弥生稲作を始め、ついに右様の古墳文化圏を作った。西暦二八〇年代編集『三国志』の「魏志倭人伝」は、千二百年の歳月の間に増殖した倭のムラ・クニの戸数を、二万余戸・三万余戸・七万余戸・外に千戸単位で多く記載し、狭い土地で境界を争っていると、あざ笑っている。必然、未開の東方へ進出する有力集団が出来たわけである。

『新編姓氏家系辞書』に、物部は、神別第一の大族で、「天神本紀」に「饒速日尊、天神の命をうけ、天盤船に乗って天降り、河内国河上嵯峰に坐す。そのご大倭国鳥見白庭山へ遷り、長髓

彦妹御炊屋姫を娶り姫ませた。その物部は、久留米市の〔高良玉垂命神社（大坐）〕（高良大社）が祖神の宮であった」と、饒速日をどこの出自、誰の子孫ともせず、天神の命・天盤船に乗ってなど、と綾をもつて記述する。

第二章、第五節、注(三)で述べた通り、『日本書紀・神武紀』に「はるか東の地（東夷）の大きな邑に君主がおり、小さな村にも長がいて、おのおの境界を分けて競い合っている。その地へ一足早く饒速日なる者が入っていると聞いたので、神武もそこへ行つて都をつくろうと決意した」と。「天孫降臨」と言う大義名分を立てて倭の統一にかかった。

神武四年一二月紀には、天皇の軍は金鷄に助けられて長髓彦を鷄邑に討つたと記す（河出書房『日本歴史大事典』）。饒速日は神武より早く大和に入っていて地の利に詳しく、土豪長髓彦成敗に参加したわけ。神を神奉する物部は軍事刑罰に従事して、全国至る所に拠点・神社を作り、大和朝廷最大の隷属民であった（『姓氏家系辞書』）。なお、橿原神宮神殿広場に、神武即位紀元は西暦紀元と六六〇年の格差のある事を掲示している。



長崎県教育庁学芸文化課から送付いただいた資料に、「県指定史跡、式内社志々伎神社跡（平戸島、平戸市野子町）は、祭神は仲哀天皇第十城別王。同社は古代朝鮮との交易、中世には松浦

氏との関係において崇敬され、肥前国延喜式三社の一つ。壱岐・対馬の式内社に比べ規模が大きく、式内社の形を現在までよく伝えていて歴史的価値が高い」と記す。

これは、朝鮮半島↓対馬―壱岐―平戸島（以上、長崎県）―有明海―筑後河口―筑後（久留米市）間の安全な航路の一つであり、多くの島や険しい出入のある筑紫を守る海路となったとみられる。『校訂筑後志』（久留米市資料）に、「神号高良玉垂命というは干・満の両波を奉行せしむるの故をもつて玉垂と号す」と記す。

仲哀・神功の子応神天皇五代目継体は母振媛に伴われ越前国（気比神宮）に育ち、五二七年、近江毛野臣六万の大軍を率いて日本府の任那に赴き、新羅に敗られた南加羅（百濟）などを復興しようとした。しかし前述の通り、筑紫国造盤井は新羅と深い縁故を持っていたから、任那に赴く毛野臣の軍を阻止して戦った。

継体は、物部鹿鹿火・大伴金村を遣わして磐井を討した、と『古事記』は記す。ヤマト政権が先住民の増殖地を征服した後は、その地の豪族を国造・郡司等に任じて統制させる事が多かったが、物部出自の筑紫（肥前・筑後）を物部鹿鹿火に討たせた事は、継体の失政のようにみられる。『姓氏家系辞書』は、盤井筑紫君・毛野臣等を出自未詳と記す。歴史編集において都合の悪い資料はよく抹消される。そんなことの故によるのではないか。

『魏志倭人伝』の「卑弥呼、以て死す」は二四〇年である。倭の西九州に増殖繁栄して来た「邪馬志国」の女王として、それは

大陸の稲作文化に密着して来たシャマン（巫女）だったことには  
違いない。ヤマト政権の勃興期と重なるので、神武の祖神天照  
大神に擬する向きも出るわけである。

## 第四章 白山信仰興隆の経緯

### 第一節 白山神鎮撫の空海 白山信仰喚起

空海は宝亀五年、讃岐国（香川県）に生まれ、祖父から学を習  
い、桓武天皇延暦七年、一四歳で奈良京の官寺に入門し、一僧か  
ら虚空藏求聞持法（虚空藏菩薩を本尊として修行する法）を示されて、四国阿波・室戸崎等  
で納得のゆくまで修行した。

三一歳で官度を受け（自分で程度して僧になるのは私度僧）、延暦二三年留学僧に選ばれ、  
遣唐使に従って入唐し、長安に入った。南方の青瀧寺において唐  
代切つての巨匠惠果から、胎藏・金剛兩大法の密教をわずか半年  
余で伝授・灌頂された（若い時の虚空藏求聞持法）。惠果は、その他重要事項  
一切を空海に授け、力尽きて死んだ。六〇歳。大勢の弟子たちは、  
師の碑文・書筆を空海に依頼した。唐帝も空海の漢詩文・筆蹟を  
高く評価していたからである。他に、空海は長安城内の寺で、北  
印度の牟尼室利三藏法師に学び、新訳の『華嚴経』・独鈷（密教修法の時、  
等を受けられた。延暦二四年帰朝し、膨大な經典（中国では六世紀代、  
空海と弟子が昼夜筆写の金剛胎藏界曼陀羅、ほか凶像一〇点、道

具類二〇余点を進献した。時に三三歳。

④空海が生まれる前に、天朝に大事件があった。女帝二代孝謙

称徳（重）に寵愛された僧道鏡が皇位継承の野望を、和氣清

麻呂が宇佐八幡宮（大分県・祭神神功・地）の神託と称して阻止し、大

隅（鹿児島）に流された。後、桓武天皇に新任されたが、延暦一八

年死去した。藤原氏の助言もあつたとみられ、天台宗延暦寺

の最澄により、清麻呂の菩提寺として高雄山寺（京都市）が開

基された。大同元年、帰朝の空海のため、寺内に宿房を建立

したので、空海を慕う修行僧が山寺周辺に多く寄宿の坊を建

てた（後に阿波寺は東寺本）。

大同四年、嵯峨新天皇皇后の難病を祈願平癒したが、必ず良薬

を併用する事を説いた。薬師寺は所々の国にあって薬草を栽培し

ていた。そして、国内から多大の稲束が割り当てられていた

（弘仁一一年成立『弘仁式』（細目に空海の進言））。

大同七年、天台宗道場比叡山に対して、空海は紀伊国高野山に

真言密教の本格的修行道場を建設する事を進言して、同山の下賜

を許された。

⑤『神功紀』に記す（紀・紀伊国造豊耳命）は、丹生都比

売神・高野神ほか百余神に奉仕した。（『新編姓氏家系辞書』

の要約）。その後裔の丹生津比売は、丹生都比売神・高野神

に仕えていたわけで、朝命によって同山（田部三）を空海に

開け渡して、真言宗高野本山を建設してゆくわけだが、彼女



は空海が春秋二回訪れるのを待ちこがれたという(『続群書類  
従』「空海僧都伝」)。

弘仁一四年、平安京南区教王護国寺の下賜を許され、学僧五  
○人の真言修法の道場とし、東寺と改称して空海の高弟実恵が教  
授した。同年、越前国から加賀国が分立した。空海は朝命を請  
け、新国府近くの野里村(小松市)阿稜山(七〇m)の麓に、敦賀気  
比神社の摂社天利劔神社を勧請して、俱利迦羅竜王の変化身俱  
利迦羅不動明王を習合して祀った。

それを金劔宮と称して、白山の荒ぶる水分神の鎮撫をして王朝  
の稲作安全を祈願した。南方山続きの岩倉山の岩倉観音(代現存、戦国時  
が、白山を東南に観ての御祈祷所であったと見られる。そこへ参  
る行者谷や中峠町(行者の宿田所)がある(小松市原町発行『原町の  
歴史』)。

②(一)原町は昔、韓国百済から渡来した僧が阿弥陀経を誦えた霊  
地だというので弥陀ヶ原と呼ばれていた。花山法王(九八六)  
が真言道場那谷寺(現存)に参詣の時、金劔宮の由来に感動  
して五重塔を建てた。そのため、崩壊前までは「塔ヶ原」と

呼んだ事もあった(前記同資料)。

(二)仏御前は永暦元年、(五重塔の)塔守白河太夫の娘に生まれ、  
幼少より深く仏法を信じ「仏」と呼ばれていた。一四歳に上  
京し、叔父のもとで白拍子となった。美貌で優れた歌・舞  
はたちまち京中の評判となり、平清盛の寵愛を受ける身と

なった。しかし彼女は、世の無常を悟り、一七歳で剃髪して  
湛空上人の弟子となった。安元元年、美濃国を通り越前穴馬  
谷を越えて古里へ逃げ帰った。近くの山に先祖の廟を建てて  
祭祀したが、二十の年夭逝した。その後、京都嵯峨野の智照  
尼から、形見にと遺して来た自身の乾漆座像が、仏殿様の立  
派な厨子に納めて送られて来た(今、千才庵に祀る)。以来、  
この地を「仏ヶ原」と呼ぶようになり、遠近の者によって、  
屋敷跡に墓石・碑が建てられた。そうして慰撫八百余年、手  
の跡が広く深く、石を彫り込んでいる(重松市)。平家物語・源  
平盛衰記等も、仏御前を惜愛したため、「金劔宮は、嵯峨天  
皇弘仁一四年始めて、仏ヶ原に奉祝」と、金劔神社の由緒は、  
時代を転倒して書き遺した。

(三)大和村史が始まった四〇年近く前、鶴来町金劔宮も「仏ヶ原」  
から請求したという伝えを聞いたので、古老にその場所を聞  
いたら、手取川上流を指された。同時期、鶴来町史編集長故  
塩谷さんが拙地金劔神社を訪ね、当社の秘蔵である神のより  
しる三体の木像や俱利迦羅不動明王、由緒書き板等を見て、  
金劔宮より金劔神社(明治初年神仏分離前)が古いのでは、と言われ  
た。

そのあと鶴来町の上流隣河内村教育委員長故上山秀之さん  
を訪ねた。そして、「弘仁一四年加賀国が越前国から分立し  
た時、空海が原村に金劔宮を建て、顕密両宗の加賀国高雄山

寺も建てて白山神に祈願した。鶴来町金劔宮からの白山登頂は非常に難路のため、まず河内村から登る道が開かれた。それは天長八年頃、天台僧宗叡しゅうゑいという人だったが、天台へは帰らず、空海の東寺へ入門し、入唐修練して東寺長者に登り、清和天皇の仏門師南をされた」等々、調べた限りを詳しく述べ、河内のどこから伐り開いたかと問うた。若僧の私の話を黙って聞き、学芸員とみられる方を案内につけられた。彼は、不動様のある谷から山の尾根へ登り、尾伝いに白山へ辿ったのではないかというので、一緒に登った。平らな尾根に、大岩が三個くらいあって、干支かんし（夫年曆を）何坊、何坊・と並べて刻ったのを見つけた。

昭和五八年『河内村史下巻（民俗編）』が贈られた。河内村の河川・山々・花木鳥獸類・気象・地質・狩猟・漁撈等まで余す所なく述べ、さらに鶴来・金沢方面で資料・古文書をあさり、県史・各郷土史の正否を糾し、久保遺跡二万年前の発掘石器について、朝鮮半島との深い関わりを考え、河内の古代・特に弥生時代の出土遺物を精査して、河内村こそ、手取川と共に、加賀中郡の文化圏の発祥地だったと喝破された（敦賀に上陸した韓民が、白山比咩を手取川に請来祭祀した事が、図らずも上山さんによっても解明された）。また、越前・出雲の国譲等が北陸の四道將軍孝元天皇王子大彦命に關する事も史料的に追及された。「民俗伝承」に「歴史科学」

のメスを入れて、不朽の遺産を開発し残された。

四俱利迦羅不動明王と称する仏は、雨水を司る俱利迦羅竜王が不動明王の利劔に巻き付いたもので、空海が唐で書写して請来した曼陀羅の中の一尊像である。宮中神泉苑で、天下の日照を祈願して豪雨をもたらした不動明王である。——治承四年五月一日夜、木曾源義仲は五千騎をもって平家軍四万余騎を礪波峠（越中・加賀）で、多数の牛の角に松明を着け、峠下へ追い落とし撃滅した。俱利迦羅不動明王の靈験だったとして、以後、俱利迦羅峠と呼ぶようになった（源平盛衰記）。和氣氏が高尾山寺に空海を住まわせて山寺を充実すれば、空海を慕う多くの修験僧が寄宿して教えを請う。自然、真言宗東寺の別格寺となる。そして弘仁一四年、新立の加賀国に、荒ぶる白山の水分神祈願の金劔宮と共に、顕密両宗の寺院を建てた。「国の根幹である稲作を守らなければならない」という空海の信念であったとみられる。

『日本後紀』は、嵯峨天皇弘仁七年一月（五十四）仁明天皇天長一〇年一月が欠失しているが、仁明天皇承和二年三月、空海高野山に死去す。同六年三月「加賀国高雄山寺、真言別院と為す」と宣下した。

仁明天皇承和二年三月二日「大像都伝灯大法師位空海、紀伊

国高野山金剛峯寺に終わる」。「同二五日、内裏近習一人を遣わし、並びに喪料を施す」。天皇の弔書は――。

「真言の巨匠、密教の宗師、わが国家の護持に、のりうつる。(中略) ああ哀しいかな。禅居は僻地で、凶報は遅い。この使者が走つても葬儀に間に合わない。これも恨みとし、深い悲しみはどうしようもない。古くからのきずなを思いはかつて、悲しみとさびしさを知る。今は、はるかに一書を託して弔う。これを取り扱う小僧も、僧室に入つて、いかに悲しみ悼むことか。このことも添えて、この旨達する」と。

空海から密教伝授・灌頂を受けた天皇の断腸の思いが、ひしひしと伝わる。一臣下に天皇の、このような弔書は異例である。<sup>(八三三)</sup>天長九年一月から三年間、空海の看護に着き切り、六二歳(数え)の最期を看取つた丹生津媛の悲しみも想像に余りある。万人に悦びを与え、万人に悲しまれて逝つた空海への、絶大な敬慕は今に衰えない。なお、高野山の一番奥山に丹生津比売神社が祀られている。

## 第二節 白山開登の天台僧宗叡 東寺へ入門・入唐、修練・清和上皇仏門師範

『日本三代実録』、略称『三代実録』(五六代清和・五七代醍醐・五八代崇徳(孝天)を、寛文一三年板版に刊行した松下見林は「建武や応仁の乱に会つて、<sup>(六一七四)</sup>虫くい、塵に埋もれ、重複する文章、字句の転倒・入れ違い等、

数百年の後に、これを正す事は難事であった。二、三〇年来、類聚国史・諸書を検証して、欠を補い誤りを正す。後の君子がなお誤りを正す事を」(要約)と。木版『三代実録』に後記する。

<sup>(九三四)</sup>昭和九年吉川弘文館刊『日本三代実録』は松下見林の板版を原とし、諸書により校訂を加えて、東大教授故黑板勝美さんは、本書の定本を作ろうとされた。それを今、非才が見直そうという。その『三代実録』「光孝天皇・元慶八年紀」に、長文の宗叡の一代記があるので、次に要約する。

宗叡は左京区の人で、俗姓は池上氏。一四歳で出家し、内供奉十禅師(宮中道場内で、御齋会や夜居の役を勤めた学徳兼備の十人の禅師) 載鎮に従つて経論(お経と解)を学び、天台宗比叡山に住居した。

具足戒(男僧二五〇戒、女僧二四八戒、いましめ)を受けた後、義演法師から法相宗(奈良仏教)を学んで、天長八年比叡山に帰り、菩薩戒(道を修める戒)を受け、「天台宗大義」を諳するまで学んだ。円珍和尚に従つて園城寺

(三井寺)において両部大法(金剛胎藏西)を受く

② は一四字分の囲み線。欄外注として「神宮文庫蔵林崎文库本・国学院大学蔵淀藩本、及び扶桑略記に據つて補う」と記すが、この補充は黑板さんの勇み足のようである。続く文書に――、

時に、叡山の主神が人の口をかり、「汝の苦行に吾は擁護しよう」

と告げたので、遠くの旅に出た。すると二羽の鳥が従い、暗い夜には火を照らし合うので、靈験だと信じた。そのあと宗叡は越前国白山に到達した。(そして、山林を伐り進んだが)二羽の鳥が前後に従って、夜路を照らすので、随行者は不思議がった。しばらくして、宗叡は東寺に移住した。小僧都実恵に就いて金剛界大法を学び(実恵は、東寺第三長者、空海が第一長者)、高野山を訪ねて小僧都真紹から阿耨梨位の灌頂を受けた(真紹は、東寺第四長者)。太政官内蔵寮から糧物を支給されるようになった。

①吉川弘文館『国史大辞典』「知証大師伝」、略称「円珍伝」を、次に要約する。

円珍寂後一〇年、延喜二年僧綱所(僧を統轄し位階を授ける役所。高位を領う時)から円珍の伝記を撰述して「国史所」に呈すべき旨下令されたので、弟子七、九人が会合し、円珍の平生・遺文等を勘合して筆記させ、清行に渡した。彼は円珍の晩年愛遇された一人で、精魂をこめて漢文体の伝記を、編年体で記述。清和から醍醐にわたる天皇の庇護や、藤原氏の崇敬。在唐中や帰朝後の「史料」等が細大洩らさず記述された。そして今日、伝本所蔵か所・版本・活字本(経群本)等々多数にのぼる。

(二)同じく『国史大辞典』の「円珍」を要約する。

円珍仁寿元年入唐。空海の学んだ青竜寺で三部大法(金剛界、胎藏界、蘇悉地(密教)の諸儀法)・大灌頂を受け、他の寺で諸学を学び、大乘小乗經、律論疎等四百四十余部一千卷を持して天安二年帰朝。貞観五

年園城寺において、宗叡に両部大法を授け、翌年清和天皇以下三〇余人に灌頂。寛平二年小僧都を授けられ、翌三年示寂、七八歳。一尊の儀軌(一番の)を受けた者百余人、手度(自分で得)剃髪して大比丘となった者五百余人、登壇受戒僧三千余人。著作九〇余編。これにより円珍小僧都是一躍、知証大師号を贈られた。——「歴史の真実」にはこういう落とし穴がある。

貞観四年宗叡は、高丘親王こと真如(元平城天皇皇太子。皇妃葉子の謀叛敢て葉子自号を頂き東寺第一長者空海の後、第二長者となる)が西唐から印度に渡る計画に従って入

唐。青竜寺始め所々の寺で、秘奥伝授灌頂。聖善寺善無畏三藏法師の旧院の門徒となつて、三藏が所持した金剛杵(印度の武器。頭領を破砕法具で、空海も西印度僧牟尼室利三藏法師から教えを受けて同様の頂く)や、経文・経論・諸尊の法則等を授かつて、貞観八年、華南の明州望海鎮に来て、便船を得て順風三昼夜で本朝に帰着した。

清和天皇は大悦び。実は、清和が皇太子になった時、宗叡は選ばれて東宮の侍従となった(記述)。さらに、甥の真如がマレーシア半島付近で病死した事が従僧によって知らされていた。また東支那海の渡航は厳しくて遣唐船はよく難船し、唐の学僧鑑真のように五度難破して失明しながら東大寺に聖武上皇以下を授戒。等を聴いていたからである。

多くの僧が宗叡の金剛・胎藏界の密教を伝える事を望んだので、東寺において多数の学生に教授し、胸襟を開いて説いた。

(八六九) 貞観二年権律師、同一六年権少都となった(この頃、東寺第)。そして、

天皇に金剛界大毘盧遮那三摩地法(金剛界大日如来の二種菩提心・勝義・行願・三摩地)・観自在菩提

秘密真言法(観世音菩薩の)を伝授。また、国家のために、胎藏金剛両界の大曼陀羅を造つて、宮中修法院持念堂に安置した。

(八七七) 同一九年、清和は皇太子陽成に譲位され、仏道に帰依して深く

苦悩し、空しさを悟つた。宗叡は上皇に、華嚴涅槃(華嚴経・涅槃経により煩悩を断じて悟りの境に)

密乗戒(仏法灌頂の前は、三種善提心をもちて授ける戒)を上皇に伝授し灌頂した。

仏法を真摯(しんし)に求道される入道清和上皇に、宗叡は全身全霊、窮

極の仏法伝授であつた。全く上下対等、以心伝心。

上皇は、衣服・臥具・珍宝を車に乗せて、宗叡に親施(しんせ)した。宗

叡は、これを全て東寺・延暦寺・東大寺に分捨(ぶんしゃ)した(東大寺大仏の首が地裏で転落損傷した時、真如に修復の勅命が下り、宗叡は真如のもと、広く)。そして、一物も自身に入れなかつた。

この年の冬、最高の僧上位を勅賜された(大僧上位)。上皇の山城・

大和・摂津国の名山寺院の巡覧に従い導き、丹波国水尾山(みのお)に到着

して終わつた。

和尚の性は沈着、言談は好まず、齋食(仕事後に出る食事)にあたつては、

濃淡を言わず、いまだかつて寝るのに衣裳を脱がず、念珠を手か

ら離さなかつた。年七十六、禅林寺に終焉(しゆつえん)。



邪馬壹国は、魏王返礼の三角縁鏡の多く遺る畿内大和にあつたとか、いや古墳文化の多く遺る九州筑紫地域にあつたとか。三千年来、いや三千年前、困苦を乗り越えて建国に夢を築いて来た日本人。その実利と夢を追う性は永遠に終わらないであろう。

なお、「魏志倭人伝」は、すでに述べた二万戸・七万戸の外に、三万戸の大国を示唆している。それは、前に少し触れた「熊襲」(肥後↓熊本)とみならず、検証できる考古資料があれば、継続の著に述べたい。

印刷の都合により、ここで筆を止めます。遺言にもとづく白雲山・金劔神社の歴史の解明は、継続の著書に譲ります。従い、本書は未完につき、ご利用の方はご連絡願います。

二〇〇八・六・一 高橋 義一

# 平成19年度事業（実績）報告

20年3月31日 郡上郷土史研究会

月	日	研修・行事・その他	場 所	備考
4	18	役員会 『郡上古日記』講読会	町民センター 町民センター	総会
5	12 16	19年度総会 『郡上古日記』講読会	地域事務所 町民センター	
6	27 20	調査研究 『郡上古日記』講読会	篠脇山 町民センター	石仏撮影
7	18 28 31	『郡上古日記』講読会 阿千葉城跡掃除 役員会	町民センター 阿千葉城址 地域事務所	東庄町来訪者対応
8	7	東庄町来訪者の接待 明建七日祭り見学	明建・牧地区 明建神社	
9	25 19	調査研究 『郡上古日記』講読会	篠脇山 町民センター	写真撮影、記録
10	17 17	役員会 『郡上古日記』講読会	町民センター 町民センター	下半期計画
11	12 21 30	調査研究 『郡上古日記』講読会 調査研究	明建、牧地区 町民センター 牧地区	写真撮影、記録 写真撮影
12	5 17	調査研究 郷土史研究会全体会	牧地区 活動報告、講演、懇親会	写真撮影 やまつつじにて
1		活動なし		
2	20	『郡上古日記』講読会 『史苑やまと』編集開始	町民センター 自他にて	原稿集め
3	19 19 19 30	調査研究のまとめ 『郡上古日記』講読会 打合会 『史苑やまと』 関係原稿作り 19年度実績のまとめ、 会計整理報告	自宅 町民センター 自宅にて 自宅その他 自宅その他	『史苑やまと』編集

# 平成19年度 会計報告

郡上郷土史研究会

## 【収入の部】

項 目	金 額	摘 要
繰 越 金	139,634	前年度より繰越金
会 費	38,000	2,000×19
特 別 会 費	28,000	2,000×14
売 上 金	7,000	古日記 (600or1,000)
助 成 金	60,000	郡上市より
寄 附	3,000	佐藤とき子先生より
利 息	155	通帳利息
合 計	275,789	

## 【支出の部】

項 目	金 額	摘 要
会 議 費	6,336	研究会、役員会
事 業 費	252,448	講師謝礼 13,000 千葉東庄接待 6,160 全体会、懇親会 32,288 会誌『史苑やまと』 積立金 201,000
事 務 局 費	11,955	通信費、印鑑作製 4,200
合 計	270,739	

## 【収支決算】

275,789 - 270,739 = 5,050 (次年度繰越金)

上記の通り報告致します

会計 佐屋 ㊦

# 平成20年度 事業計画

平成20年4月1日 郡上郷土史研究会

月 日	研修・行事・その他	場 所	備 考
4	役員会 『郡上古日記』講読会 「史苑やまと」編集	町民センター 町民センター	
5	20年度総会 『郡上古日記』講読会 「史苑やまと」発行 篠脇山石仏撮影	地域事務所 町民センター  篠脇山	事業・会計報告 と計画
6	調査研究 調査研究 『郡上古日記』講読会	篠脇山 母袋地区 町民センター	石仏撮影 石碑撮影
7	『郡上古日記』講読会阿 千葉城跡掃除 役員会 調査研究	町民センター 阿千葉城址 地域事務所 母袋・古道地区	写真撮影、記録
8	調査研究 明建七日祭り見学	母袋・古道地区 明建神社	写真撮影、記録
9	調査研究 『郡上古日記』講読会	神路地区 町民センター	写真撮影、記録
10	役員会 『郡上古日記』講読会 調査研究	町民センター 町民センター 西地区	下半期計画  写真撮影、記録
11	調査研究の検証 『郡上古日記』講読会	西地区 町民センター	写真撮影
12	調査研究 郡上郷土史研究会全体会	西地区 地域事務所	写真撮影 活動報告、講演
1	活動なし		
2	『郡上古日記』講読会	町民センター	
3	調査研究のまとめ 『郡上古日記』講読会 20年度実績のまとめ、 会計整理報告	自宅 町民センター 自宅その他	



# 平成20年度 予算案

郡上郷土史研究会

## 【収入の部】

項 目	金 額	摘 要
繰 越 金	5,050	前年度より繰越金
会 費	38,000	2,000×19
助 成 金	60,000	郡上市より
雑 収 入	950	
合 計	104,000	

## 【支出の部】

項 目	金 額	摘 要
会 議 費	10,000	会議室使用料
事 業 費	80,000	講師謝礼 20,000
		調査研究費 10,000
		次回『史苑やまと』発行費 50,000
事 務 局 費	10,000	通信費（はがき ets）
予 備 費	4,000	
合 計	104,000	

# 郡上郷土史研究会会員名簿

2008.4.1

	氏名	自宅郵便番号	自宅住所	自宅電話番号	備考
1	有代和夫	501-4613	大和町名皿部916	88 - 2201	
2	石神堯生	501-4611	大和町万場2233	88 - 2413	理事・会長
3	井俣初枝	501-4611	大和町万場578	88 - 2758	理事
4	大野一道	501-4601	大和町大間見4 - 1	88 - 2230	理事
5	大野紀子	501-4601	大和町大間見4 - 1	88 - 2230	
6	加藤文藏	501-4612	大和町剣43 - 1	88 - 2802	
7	河合利雄	501-4612	大和町剣30	88 - 3520	理事・書記
8	雉野尚子	501-4616	大和町島1558福田	88 - 3564	理事
9	此島恵理子	501-4616	大和町島3659	88 - 3659	
10	此島茂樹	501-4616	大和町島3963	88 - 2480	
11	佐尾チドリ	501-4613	大和町名皿部335	88 - 3544	理事・会計
12	佐藤光一	501-4612	大和町剣57 - 1	88 - 3201	理事・副会長
13	佐藤とき子	501-4224	八幡町城南町287 - 2	65 - 4303	
14	白石博男	5015121	白鳥町白鳥464 - 2	82 - 3235	
15	杉田安巳	501-4223	八幡町稲成498 - 1	65 - 5045	
16	高橋義一	501-4612	大和町剣720 - 1	88 - 3792	理事
17	滝日準一	501-4608	大和町牧845 - 1	88 - 2705	理事
18	滝日千代美	501-4608	大和町牧1007	88 - 3059	
19	田中章	501-4616	大和町島1743	88 - 3568	
20	田中篤	501-4616	大和町島1924福田	88 - 2792	
21	田中和美	501-4616	大和町島1686	88 - 3719	
22	田中八郎	501-4222	八幡町島谷1441	65 - 4148	
23	田中充	501-4616	大和町島1285	88 - 3436	
24	土松新逸	501-4607	大和町徳永62	88 - 2731	理事
25	箕勝美	501-4612	大和町剣380 - 2	88 - 2031	
26	尾藤誠	501-4616	大和町島5901 - 1	88 - 3261	
27	本田欽一	501-4608	大和町牧124	88 - 3160	理事・副会長
28	松井賢雄	501-4601	大和町大間見1791	88 - 3991	
29	松葉鉄雄	501-4616	大和町島2151 - 6	88 - 2836	
30	山田忍	501-4616	大和町島1016	88 - 2550	
31	山田白陽	501-4616	大和町島1289	88 - 3437	
32	山田真人	501-4605	大和町神路1776	88 - 2114	監事
33	横枕克己	501-4616	大和町島1514 - 2	88 - 2839	

「史苑やまと」第七号

平成二十年六月二十日 発行

編集発行 郡上郷土史研究会  
印刷所 白鳥印刷